

別添 1

厚生労働科学研究費補助金

障害者政策総合研究事業

強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と  
関係者による情報共有、支援効果の評価方法の  
開発のための研究

令和2年度～令和3年度 総合研究報告書

研究代表者 日詰 正文

令和4（2022）年5月

## 目 次

### I. 総合研究報告

強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、支援効果の  
評価方法の開発のための研究 . . . . . 1

主任研究者 日 詰 正 文

#### 1. 強度行動障害者支援における ICF システムの活用について

分担研究者 安 達 潤

#### 2. 強度行動障害支援者養成と現場を支えるために必要なことは何か

分担研究者 井 上 雅 彦

II. 研究成果の刊行に関する一覧表 . . . . . 24

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）  
（総合）研究報告書

強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、  
支援効果の評価方法の開発のための研究

主任研究者 日詰 正文<sup>1)</sup>

1) 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園

**【研究要旨】**

現在の支援現場における強度行動障害者支援の課題には、「問題となっている行動の背景要因を見つけることが難しいこと」、「チームで計画・モニタリングを行うための人材確保が難しいこと」の2点がある。その結果、行動の背景が特定できず過剰な拘束や投棄で対処することや、一部の事業所や職員のみへの負担が集中する状況が生じている。

本研究では、この2つの課題を解決するためには「狭い範囲の情報だけで背景要因を見つけようとしなない」「事業所内だけでなく地域の協力者を含めたチームで取り組む」が必要になると考え、全国の支援現場での実装につながるモデルを開発することを目的とした。

1年目（令和2、2020年度）は、以下3つの調査・研究を行った。

- (1) 強度行動障害者支援について、「アセスメント」や「記録」「ICF」「ICT」などのキーワードに該当する先行研究の把握
- (2) 強度行動障害者支援現場の情報収集や分析、情報共有の状況に関するヒアリング調査
- (3) 上記(1)(2)の調査をふまえた強度行動障害PDCA支援パッケージの開発

2年目（令和3、2021年度）は、以下2つの調査・研究を行った。

- (4) 強度行動障害PDCA支援パッケージを複数施設で試行（一次調査）
- (5) 上記(4)の試行を踏まえた「実践検討・意見交換会」の実施（二次調査）

以上の研究成果として、強度行動障害PDCA支援パッケージ（「行動と環境の包括的アセスメントによる環境調整支援パッケージ」）を完成させた。

**分担研究者**

安達 潤 北海道大学大学院教育学研究院・教授  
井上雅彦 鳥取大学医学系研究科臨床心理学講座・教授

**研究協力者**

市川宏伸 日本発達障害ネットワーク・理事長  
松上利男 全日本自閉症支援者協会／社会福祉法人北摂杉の子会・理事長  
志賀利一 全日本自閉症支援者協会／横浜やまびこの里 相談支援事業部・部長  
會田千重 独立行政法人国立病院機構  
肥前精神医療センター・療育指導科長

大黒哲史 大阪府立砂川厚生福祉センター  
竹矢 恒 社会福祉法人同愛会 日の出福祉園・副事業所長  
高橋亜希子 株式会社エンカレッジ・取締役  
今出大輔 社会福祉法人旭川荘 おかやま発達障害者支援センター  
中谷啓太 鳥取大学附属病院 子どもの心の診療拠点病院推進室  
成田秀幸 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園診療部・部長  
伊豆山澄男 国立重度知的障害者総合施設のぞみの園生活支援部

村岡美幸	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部研究係
高橋理恵	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部研究係
熊岡正悟	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部研究員
内山聡至	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部研究係
岡田裕樹	国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部研究員

## A. 研究目的

本研究の目的は、強度行動障害者支援の現場において課題となっている「背景要因の効果的な把握」「対応者の負担集中の解消」について検討し、全国の支援現場での実装につながるモデルを開発することである。

具体的には、「背景要因の効果的な把握」については、①ICF（国際生活機能分類）を用いて、支援対象者の全体像を理解する、②解決につながる、当事者自身のニーズ、活用できる特性やニーズを「冰山モデル」の様式で整理し、支援の焦点を明確にする、「対応者の負担集中の解消」については、③ICT（情報通信技術）を活用する、④チームによる支援計画の作成、結果の分析、支援計画の修正を行う、といったプロセスを一連のものとしたモデルの開発を目指した。

なお、調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た。

## B. 研究方法

### 1. 強度行動障害者支援に関するアセスメントと記録、情報共有等についての先行研究調査

本研究は、強度行動障害者支援について、本研究の目的とする効果的なアセスメント、記録、情報収集、情報共有などに関する先行研究を把握することを目的として、「アセスメント」、「記録」、「ICF」、「ICT」などをキーワードとした文献調査を実施した。

■対象：強度行動障害を対象に、本研究の内容に係

る研究に該当する論文、書籍等

■方法：論文検索データベースである「J-stage」、「CiNii」による文献抽出

■内容：

本研究の内容に係るキーワードについて検索を行い、該当する論文等について調査を行う。

キーワードは以下の通り。

- ①「強度行動障害」のみ
- ②「強度行動障害」と「アセスメント」
- ③「強度行動障害」と「記録」
- ④「強度行動障害」と「ICF」
- ⑤「強度行動障害」と「ICT」

■期間：令和2（2020）年6月から令和3（2021）年1月

### 2. 強度行動障害者支援事業所におけるアセスメントと記録、情報共有等の実態についての調査（ヒアリング調査）

本研究は、強度行動障害者支援の現場において行っている「背景要因の分析」に必要な「アセスメント」「記録」「情報共有の方法」の現状を把握することを目的として、強度行動障害者支援を行っている事業所へのヒアリング調査を実施した。

■対象：強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所6カ所（本研究の研究協力者の所属する事業所その他分担研究者から推薦のあった事業所）

■方法：訪問、オンラインによる聞き取り

■内容：以下の4点

- ①利用者の障害特性を把握するための取り組み、②支援記録の方法、記録のフォーマット、③職員間の情報共有方法、④記録や情報共有におけるICT（情報通信技術）の活用状況

■期間：令和2（2020）年10月から12月

### 3. 強度行動障害者支援のためのICF、ICTを活用したPDCAサイクルの運用マニュアル案作成のための研究

本研究は、調査1、2を通じて把握した内容を基に、支援現場で実施しやすいパッケージを開発することを目的として、運用マニュアルの検討を行った。

- 方法：本研究検討委員会でのディスカッション
- 内容：パッケージを現場で運用するための手順、使用するツール（アセスメント、ICT など）についての運用方法の検討。
- 期間：令和2（2020）年10月から令和3（2021）年3月

#### 4. ICFおよびICTを活用したPDCAサイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査（一次調査）—

本研究は、令和2（2020）年度に開発した強度行動障害PDCA支援パッケージの効果や課題を把握することを目的として、支援現場での試行と意見収集を行った。

■対象：強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所14カ所（本研究の研究協力者の所属する事業所および推薦のあった事業所から選定）。

■方法：支援現場での試行とアンケートによる意見の収集

■内容：

##### （1）強度行動障害PDCA支援パッケージの試行

各事業所で対象となる利用者を選定し、強度行動障害PDCA支援パッケージを使って情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを複数回繰り返す取り組みを行った。

本調査では、ICF記入については分担研究者の安達が開発した「ICF情報把握・共有システム」、ICTツールとしては分担研究者の井上らが開発した「Observations」を使用した。

##### （2）試行後のアンケート調査

試行調査に参加した事業所を対象に、強度行動障害PDCA支援パッケージについての評価（5件法）、効果や課題等に関するアンケート調査への協力を求めた。

■期間：令和3（2021）年5月から7月

#### 5. ICFおよびICTを活用したPDCAサイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および

#### 実践検討・意見交換会の実施（二次調査）—

本研究は、強度行動障害PDCA支援パッケージの効果や課題を把握することを目的として、「実践検討・意見交換会」を実施した。

■対象：「実践検討・意見交換会」に参加した強度行動障害者支援に取り組んでいる事業所29カ所。

■方法：支援現場での試行とアンケートによる意見の収集

■内容：

##### （1）強度行動障害PDCA支援パッケージの試行

各事業所で対象となる利用者を選定し、強度行動障害PDCA支援パッケージを使って情報の整理、行動の記録、支援手順書の作成と見直しを複数回繰り返す取り組みを行った。

##### （2）試行後のアンケート調査

試行調査を行った事業所の支援者を対象に、強度行動障害PDCA支援パッケージについての評価（5件法）、効果や課題等のアンケート調査を行った。調査内容は、一次調査と同じ内容とした。

■期間：令和3（2021）年10月から令和4（2022）年1月

なお、「実践検討・意見交換会」は以下の通り実施した。

<開催方法>：オンライン

<開催日>：全3回

・第1回 令和3（2021）年10月29日

・第2回 令和3（2021）年11月29日

・第3回 令和4（2022）年1月13日

<募集人数>：32名

<参加要件>：以下の要件を提示の上、募集した。

- ・国立のぞみの園が開催する強度行動障害支援者養成研修（実践研修（指導者研修））修了者または修了者の推薦を受けた者
- ・全3回連続して出席できる者
- ・自閉症を中心とする強度行動障害がある方の直接支援を行っており、事業所長の推薦を受けた者
- ・スマートフォン、タブレットのアプリを用いた記録が可能な者

## C. 結果

### 1. 強度行動障害者支援に関するアセスメントと記録、情報共有等についての先行研究調査：

#### (1) 検索結果

J-stage のキーワード検索で抽出された 200 件程度の論文には強度行動障害者支援における「アセスメント」「記録」に実際に焦点を当てた研究は 30 件程度であった。

その中には、日常場面における正確で客観的な行動記録を「当該行動が生じた時もしくは業務中や空き時間に素早く起動・入力でき」、「非専門家が利用する場合、その入力画面がシンプルであること」などの視点から開発された行動記録アプリケーション「Observations」が開発されていた（井上、中谷他 2019）。この Observations は、支援現場での検証を踏まえ、「筆記用具なしで記録が可能となり、紙ベースの記録と比較して記録の容易性」があること、「即時にグラフ化（視覚化）されることで過去の自分の調子と行動を見直せる、といったセルフモニタリングも促進しうる」効果が確認され、「家庭場面での適応行動の自発を対象者や家族が記録し、支援者に送付して助言を得る用途としても有用である」と紹介されていた。（井上、中谷他 2019）。

情報共有、ICT に関する先行研究では、J-stage の「強度行動障害×ICT」をキーワードとして抽出した 4 件の論文のうち、強度行動障害に特化した研究は 1 件のみで、前述の井上らの研究であった。対象を強度行動障害に限らず、発達障害者や知的障害者に広げると、コミュニケーションに誤学習をきたしている知的障害特別支援学校小学部児童に対し、ICT 機器やアプリ「SimpleMind Pro+」や「DropTalk HD」などを活用した事例（山崎、水内 2019）、「支援機器がヒトに合わせる」アプローチとしてデータマイニング技術や機械学習を用いて、ユーザーの動作・発声パターンから意図や欲求を推測し、実行可能にする制御システム開発」事例（古川、荻田他 2020）などが紹介されていた。

ICF については、安達らの社会実装研究において、多職種間や多事業所間の連携ツールとして、有効であることが報告されている。

### 2. 強度行動障害者支援事業所におけるアセスメントと記録、情報共有等の実態についての調査（ヒアリング調査）：

#### (1) 記録内容

6 事業所を対象とした調査の結果、各事業所が行っていた記録は、①「基本情報」利用者の概要を理解するためのプロフィールシート、②「日常の記録」日々の様子を把握した日誌やケース記録など、③「臨時の記録」特定の行動についての頻度や時間などを把握した行動観察記録やスキッター・プロットなどの 3 つに整理できた。

①基本情報については、どの事業所においても、独自の記録様式を作成して情報の収集と整理を行っているが、その内容は事業所によって異なっていた。②日常の記録については、どの事業所においても、基本は参加／活動に関するグループ単位の記録と、食事・睡眠・排泄等の ADL に関する個別記録シートを作成していた。③臨時の記録については、どの事業所においても、行動分析記録（ABC 分析）と行動頻度記録（スキッタープロット）を使用していた。

#### (2) ICT 活用状況

6 事業所中 4 事業所で、「基本情報」「日常の記録」を保存するための ICT 活用は行われていたが、「臨時の記録」について ICT の活用は行われていなかった。

ICT を導入する利点は、「手書きよりも記入時間の短縮や労力の軽減が可能」「記録の分類、職員同士で共有が容易」など、課題は「ICT 活用に職員の理解度に格差があり導入が進まない」「ICT 活用にかかる費用面の負担がある」などの意見があった。

#### (3) 記録の活用に関する現状

強度行動障害への対応時に、「基本情報や日常の記録に立ち返った支援計画の見直しは行われていない」「臨時の記録は蓄積されていても、分析と支援の計画修正を行う時間とアドバイザーの確保が難しい」ことなどから、「記録を取ることに負担感が大きい」と感じている現場が多かった。

### 3. 強度行動障害者支援のための ICF、ICT を活用した PDCA サイクルの運用マニュアル案作成のための研究：

運用マニュアルの開発にあたって、検討委員会で議論したのは、以下の点であった。

・ICFについて、包括的な情報の整理ツールとしての有用性が認められている一方で、網羅的な確認作業を行う負担感から利用が敬遠されることが多い。「記入作業の分担」「非該当項目のスキップ」などによる負担感の軽減を目指す。

・ICTの通信分野での活用は、新型コロナウイルスの影響下で急速な普及が進んでいるが、「機器の用意に関する経済的な負担」や「個人情報の取扱いに関する不安」などに対応できる運用ルールの構築を目指す。

これらの点に焦点を当てた運用マニュアルを作成した。

#### 4. ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査（一次調査）—：

##### 1. 回答

調査対象のうち14カ所、19名から回答を得た。

#### Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください

##### 評価点

・「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった

##### 効果

- ・利用者の障害特性、強みの把握と整理が行いやすくなった
- ・ICFによって環境要因も含めた利用者の理解が進み、支援の組み立てがしやすくなった
- ・ICFによって既に把握していた情報の整理や、行ってきた支援の振り返りができた

##### 課題

- ・ICFの設問が利用者の状況・状態に合わないものがあった

#### Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的に変わったかどうかについて教えてください

##### 評価点

・「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は13名で、全体の68.4%であった

##### 効果

- ・支援課題が明確となり、焦点が絞りやすくなった
- ・課題や変化が整理され、具体的な支援計画の作成につながった

##### 課題

- ・本人のニーズや意思を把握しておく必要がある

#### Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください

##### 評価点

・「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった

##### 効果

- ・ICTによって記録が簡素化され短時間で取ることができた
- ・スマホのアプリ（Observations）によって支援をしながらリアルタイムで正確に記録を取ることができた

##### 課題

- ・ICTの使用についての理解が十分でなく手間がかかった

#### Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください

##### 評価点

・「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は12名で、全体の63.2%であった

##### 効果

- ・ICFによる情報やICTによる記録によって情報が視覚的にわかりやすく確認できるため、支援者間で共有がしやすくなった
- ・利用者の行動が記録によって整理されたため、支援の優先順位がつけやすくなった

##### 課題

- ・家族や他機関と行動観察に対するアプローチや考

え方に違いがある場合は、同じツールで記録を取ることが難しい

#### Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください

評価点

・「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった

効果

・スマホのアプリ（Observations）の入力が簡単で短時間でできるため、記録の負担の軽減につながった

課題

・支援中に記録を入力することが難しい場合がある

#### Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください

評価点

・「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は15名で、全体の78.9%であった

効果

・情報が整理されるため課題を絞りやすく、支援の計画を立てやすくなった  
・記録がグラフ化されて視覚的にわかりやすくなるため記録の分析がしやすくなった

課題

・記録は効率的に取ることができたが、分析は支援者のスキルが求められる

#### Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

評価点

・「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は16名で、全体の84.2%であった

効果

・ICF、ICTを活用することで情報の収集と共有がしやすくなり、課題が見えやすくなった  
・短時間で効率的に記録を取ることができ、負担の軽減につながった  
・PDCAサイクルを行うことで支援の見直しが可能と

なり、支援者間で更新をしていくことの必要性を確認することができた

課題

・ICFは効果的だが、入力の手力に負担感がある  
・ICTに不慣れであることや、Observationsのクラウド化や操作に関する課題がある

#### Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください（例：実施手順、使用ツール等）

ICFについて

・ICF情報把握シートの記載は項目が多く、また現在の生活を見ているだけでは記載できない箇所も多々見られた  
・教育・医療・福祉の連携が重要になってくるが、利用者本人が生活場所を移行する際の資料の一つとしてICFシートのデータを活用することで、受ける事業所側の初期負担の軽減につながるとともに、本人への支援がスムーズに行われるのではないかと。  
・ICFは幼少期から記録がつながり続けることで、より適切な分析ができるのではないかと。

ICT（Observations）について

・Observations Sheetに関して、分析HPを開かないと記録の一覧が見られないことは負担感があり、アプリからも直接一覧が見られることが望ましい  
・行動記録の入力方法（書き方・表現）について例示があると入力方法が統一でき分析しやすくなる  
・Observationsは、記録の合理化や共有・分析で利用できる可能性は感じたが、使い方の周知、それぞれの現場での使い方には工夫が必要  
・クラウド上でデータが保存、共有できれば便利。  
・将来的には冰山モデルや支援の手順書作成と連動して落とし込めるようになると良い

強度行動障害 PDCA 支援パッケージについて

・冰山モデルシートも記入用紙だけではなく、記入することで支援方法の提案や関連性が考えられる項目の候補が出てくるツールやアプリになれば、支援者による技量や考え方による差は少なくなる



と感じた

- ・ ICF システムの記入完了までと、氷山モデルシート作成後に支援手順書を作成の期間がかなりタイトで、支援会議等の時間をしっかりとって考えることができなかった
- ・ 課題となる行動の選定とリストアップにより、本人の行動観察がより明確になる一方で、回数や頻度に現れてこない課題に関しては、支援者側の関わりや環境について平時の記録も併せて残しておく必要性を感じた
- ・ 家庭での様子の記録、違いを分析できたらよいと感じた
- ・ 氷山モデルの記載が、今回のツールとの連動をあまり感じ取れない

試行調査の結果、強度行動障害 PDCA 支援パッケージの評価について

- ・ ICF を活用することで対象者の障害特性や環境要因を含めた全体的な理解が可能となった
  - ・ ICT を活用することで短時間に効率的な記録が可能となり、支援者の負担の軽減につながった
  - ・ 強度行動障害 PDCA 支援パッケージを活用することで情報の収集と支援者間での共有がしやすくなった
  - ・ PDCA サイクルで支援を行うことで、支援の見直しがしやすくなった
- 等の意見が得られた。

**5. ICF および ICT を活用した PDCA サイクル支援パッケージの効果検証のための社会実装研究—強度行動障害者を支援する事業所における試行調査および実践検討・意見交換会の実施（二次調査）—：**

#### 1. 応募／参加者

- (1) 応募人数：52 名（30 都道府県より応募あり）
  - (2) 参加人数：32 名（オブザーバー参加 13 名）
- ・ 参加者の選定にあたっては、各都道府県から 1 名以上の参加とし、重複した都道府県については事業所種別に偏りが出ないようにした
  - ・ 選定されなかった者については、オブザーバー参加とした

- ・ 参加決定から第 1 回目までに 3 名キャンセルあり、第 1 回目は 29 名で実施した
- ・ 第 2 回目から 3 名欠席あり、第 2 回目以降は 26 名で実施した

#### (3) 参加者の属性

- ①階級：管理職級が 12 名、主任支援員級が 8 名、支援員級が 9 名であった。
- ②強度行動障害者支援の経験年数：「10 年以上」が 16 名、「1～3 年」が 5 名、「7～9 年」「4～6 年」が各 4 名であった。
- ③所属する事業所の種別：「施設入所支援」が 12 名、「生活介護」が 9 名、「行動援護」「放課後等デイサービス」が各 3 名、「共同生活援助」が 2 名であった。

## 2. 回答

調査対象となった意見交換会の最終的な参加者 26 名のうち、25 名から回答を得た。

### **Q1. 利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください**

評価点

- ・ 「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は 23 名で、全体の 92.0%であった

効果

- ・ 特性や強み、環境要因に関する多くの項目が網羅されていたため、漏れなく情報を整理し把握することができた
- ・ 利用者の強みや苦手な部分を分析するのに今までなかった視点で考えることができた

課題

- ・ ICF システムで問われる内容の理解が難しいため、簡略化されたものがあると良い

### **Q2. 支援課題が焦点化され、支援計画が具体的に変わったかどうかについて教えてください**

評価点

- ・ 「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は 17 名で、全体の 68.0%であった

効果

- ・ ICF システムを参考に冰山モデルシートで支援課題を整理し視覚化したことで、支援計画や支援手順書のどこを変えるべきか見えるようになった
- ・ 課題や状況が一目でわかるため、支援計画に反映する際にも効率的であった

#### 課題

- ・ 焦点化された課題をどのように支援に結びつけていくかについてサポートが必要である

### Q3. 支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください

#### 評価点

- ・ 「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は19名で、全体の76.0%であった

#### 効果

- ・ 利用者に関しての必要な情報を集めるという点で非常に効果的であった
- ・ 視覚化のしやすさや現場で記録を取れる点で効果的であった
- ・ ICTを活用することで手軽に入力ができ、記録の精度が上がった

#### 課題

- ・ ICTを使用した記録に対して、支援者によって慣れや得意・不得意がある

### Q4. 関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください

#### 評価点

- ・ 「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は13名で、全体の52.0%であった

#### 効果

- ・ 利用者の状況がデータ化されることで保護者や医師、栄養士など他職種との情報共有が行いやすくなった
- ・ ICTツールを使うことで記録の取り方が標準化され、記録の分析結果がグラフによって視覚化されるので理解しやすかった

#### 課題

- ・ 調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった

### Q5. 記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください

#### 評価点

- ・ 「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は12名で、全体の48.0%であった

#### 効果

- ・ ICTを活用することで記録にかかる負担感の軽減に一定の効果はあった

#### 課題

- ・ ICF システムの記録は項目数の多さや内容の難しさがあり、通常業務に加えて取り組む場合は負担感がある
- ・ ICT ツール (Observations) の記録を手軽にネット上で共有できればよい

### Q6. 支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください

#### 評価点

- ・ 「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は18名で、全体の72.0%であった

#### 効果

- ・ 入力した記録が自動的にグラフ化されることで、利便性が高く分析もしやすくなった
- ・ ICF システムは強みや支援の継続、修正などに分析できるため、どの部分にスポットをあてて考えればよいかのわかりやすかった

#### 課題

- ・ 行動の生起率などはわかりやすくなるが、行動に対する前後の様子がわからない

### Q7. 試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください

#### 評価点

- ・ 「効果的であった」「少し効果的であった」の回答は19名で、全体の76.0%であった

#### 効果

- ・ ICF システムは、障害特性や環境要因の把握に効果的であった

- ・ ICT ツールは、記録と分析に効果的であった
  - ・ 利用者のおかれている環境や生活の質を考える、という ICF の視点に沿うことで支援の改善が望める
  - ・ パッケージを事業所内で標準化できれば情報の更新や共有、支援会議など様々な点で活用できる
- 課題
- ・ 3ヶ月間の試行では不十分であった
  - ・ このパッケージを全国的に広める場合は使いやすい手軽さがなければ普及にはつながらない

#### Q8. 本パッケージの改善点等があれば教えてください (例: 実施手順、使用ツール等)

##### ICF について

- ・ ICF からどのように支援手順書につなげていくかについて享受する時間 (講義や研修) が必要
- ・ ICF シートは、項目数が多く、文字が小さいため見にくさがあり、特に年配の支援員への配慮が必要
- ・ 効果の判断基準で支援員間の差が出やすいと感じたため、目安となる基準が必要
- ・ パッケージの実施手順で、ICF シートを支援会議でどう活用すればよいかがあると良い

##### ICT (Observations) について

- ・ Observations を同一のアプリ内で分析結果が見られると良い
- ・ 回答分析やデータを Observations のスマホアプリから一度 PC に送るなどが手間なため、手順や操作がもう少し簡素化されると良い
- ・ 事業所のタブレットでは Observations の分析ができなかった
- ・ Observations のデータは、HP で読み込んで分析するのではなくそのまま分析結果が出せると良い
- ・ Observations2 の分析結果について、縦軸と横軸がもう少し細かく表示されると良い
- ・ Observations2 のデータは、日付を指定して分析できると良い

##### 強度行動障害 PDCA 支援パッケージについて

- ・ 活用する現場が ICT に慣れていない状態像を想定

してのツールやアプリの使用が必要

- ・ 機器の使用方法のレクチャーについてもパッケージ内に含めてはどうか
- ・ 強度行動障害 PDCA 支援パッケージの紹介文をもう少しわかりやすくしたほうが良い (図も交える等)。せっかく良いパッケージなのに、研修紹介のチラシの文章からはどういうことをするのか理解するのが難しかった
- ・ ICF の視点をどう支援改善につなげていくのか、事例の提示があればイメージがしやすかった

試行調査の結果、強度行動障害 PDCA 支援パッケージについて、「パッケージの全体評価 (Q7)」は、「効果的であった」「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 76.0%であり、効果が見られた点としては「利用者の全体像の把握 (Q1)」が 92.0%、「情報の収集 (Q3)」が 76.0%、「記録の分析 (Q6)」が 72.0%であった。

具体的な評価点としては、

- ・ ICF は対象者の障害特性や環境要因の把握に効果的であり、情報の整理がしやすくなった
  - ・ ICT は記録と分析に効果的であり、記録にかかる負担の軽減に効果的であった
  - ・ ICF、ICT を活用することで情報が視覚化され、支援者間の共有がしやすくなった
  - ・ 強度行動障害 PDCA 支援パッケージによる PDCA サイクルを行うことで、支援計画や支援手順書の作成と見直しにつながった
- 等の効果があった。

一方、「情報共有 (Q4)」と「記録の負担 (Q5)」の「効果的であった」と「少し効果的であった」の回答の割合が全体の 52.0%、48.0%と他の項目に比べて評価すると回答した者の割合が低かった。理由として、「今回の調査期間で他機関と情報共有する機会がなかった」、「ICF システムの記録は項目数の多さや内容の難しさがあった」、「アプリで即時的に記録できない状況があり転記が必要であった」、「Observations の記録を手軽に共有できると良い」といった回答があった。また、「ほぼ一人で試行しており、施設全体の理解と協力が必要」、「職場内での ICT

の環境整備が必要」、「ICT の理解や取り扱いで支援者間の格差が生じる」、「強度行動障害 PDCA 支援パッケージのレクチャーのための説明や研修等があれば良い」といった回答があった。

#### D. 考察

強度行動障害 PDCA 支援パッケージの全体評価は、「効果的であった」「少し効果的であった」をあわせた回答の割合は、一次調査は全体の 84.2%、二次調査は 76.0%であった。特に、「強度行動障害の状態にある者の全体的な理解と情報の整理」、「効率的な記録と分析」、「支援計画の作成と見直し」などに効果があると考えられた。強度行動障害 PDCA 支援パッケージを活用することで、行動の背景要因を見つけることや支援の記録と分析を迅速に行うことなどの強度行動障害者支援の課題を改善することが期待できると考えられた。

今後の課題として、強度行動障害支援における ICF システムの記入内容の検討、事業所における ICT 活用環境の整備、強度行動障害 PDCA 支援パッケージを活用した他機関との共有事例の試行の必要性等が考えられた。

また、強度行動障害 PDCA 支援パッケージを支援現場で活用していくためには、事業所全体の取り組み、事業所内で推進していく中心人物の存在、パッケージの導入効果を含めたわかりやすい資料の必要性等が重要であると考えられた。これら課題の解決に向けて、継続的な試行と検討が必要であると考えられた。

#### E. 結論

本研究は、1年目の令和2（2020）年度の研究において、「ICF（国際生活機能分類）」および「ICT（情報通信技術）」の活用が効果的であり、これらを活用した強度行動障害 PDCA 支援パッケージの開発が必要であることを把握した。

2年目の令和3（2021）年度は、強度行動障害 PDCA 支援パッケージの効果や課題を把握、分析するための試行調査を行い、最終的な強度行動障害 PDCA 支援パッケージ（「行動と環境の包括的アセスメントによ

る環境調整支援パッケージ）を完成させた。

一方で、本研究で活用した ICF システムや Observations の使い勝手、事業所での ICT 環境の整備、強度行動障害 PDCA 支援パッケージの周知、学習の機会の必要性などの課題も明らかになった。今後も支援現場での試行と改善に向けた取り組みが求められる。

#### F. 研究発表

##### 1. 論文発表

- ・岡田裕樹、日詰正文、内山聡至：強度行動障害者支援に関するアセスメントと記録、情報共有等についての先行研究調査 国立のぞみの園研究部紀要, 14 : p1-5 (2021)
- ・岡田裕樹、日詰正文、内山聡至：強度行動障害者支援事業所におけるアセスメントと記録、情報共有等の実態についての調査 国立のぞみの園研究部紀要, 14 : p6-11 (2021)

##### 2. 学会発表

- ・なし

厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)  
(総合) 分担研究報告書

強度行動障害者支援におけるICFシステムの活用について

分担研究者： 安達 潤<sup>リ</sup>

1) 北海道大学

**研究要旨**

本研究の支援パッケージにおいて活用している ICF 情報把握・共有システム（以下、ICF システム）についての効果や課題について、令和 3（2021）年度に行った一次調査、二次調査のアンケート調査および意見交換会の参加者からのコメントから考察することを目的とした。結果として、一次調査と二次調査の結果には全体として大きな差は認められず、加えて、アンケート調査の結果は概ね肯定的評価が優勢であり、ICF システムの強度行動障害における有用性を示唆するものであった。今後、今回の研究で得られた ICF システムの有用性と課題を通じて、ICF システムの改良を検討していく必要がある。

**A. ICF システムに係る研究実施の流れ**

本研究の支援パッケージにおける ICF 情報把握・共有システム（以下、ICF システム）の活用と評価に係る研究の大まかな流れを以下に示す。

- ①令和 3（2021）年 3 月 9 日の本研究第 3 回研究検討委員会会議において、愛知県碧南市で展開している ICF システムの社会実装研究に係るプレゼンテーションを実施。
- ②令和 3（2021）年 5 月 11 日と 19 日に、本研究の先行試行調査への協力事業所 15 事業所を対象とする ICF システムの研修会を実施し、先行試行調査を開始し 7 月頃までに完了。併せて試行結果のアンケート調査を実施。
- ③強度行動障害支援者養成研修の参加者から本研究の協力者を募り令和 3（2021）年 10 月～令和 4（2022）年 1 月に試行調査を実施。
- ④令和 3（2021）年 10 月 29 日（第 1 回意見交換会）において「ICF システムと行動観察システムによる 冰山モデルの精緻化」「ICF 情報把握・共有システム(ICF システム)記入・活用について」の研修を実施。
- ⑤令和 3（2021）年 11 月 29 日（第 2 回意見交換会）において、ICF システム実施に係る Q&A を実施。
- ⑥令和 4（2022）年 1 月 13 日（第 3 回意見交換会）において、試行実施の成果報告を実施。

**B. アンケート調査結果の概略**

1) 先行試行調査（一次調査）のアンケート結果

先行試行調査（令和 3（2021）年 4 月～7 月）への協力事業所 15 事業所（検討委員が在職している事業所で一定程度の支援の質が担保されている事業所等）を対象とするアンケート調査の結果概略は以下の通りである。回答方式は「効果的・少し効果的・どちらともいえない・あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった」の 5 段階リッカートで、14 事業所の 19 名からの回答が得られている。但し、リッカート評価はアセスメントパッケージ全体への回答であり、コメントは ICF システムに関わると思われる内容のみを取り上げている。

Q 1. 「利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください」については、「効果的(5)・少し効果的(11)」は合わせて 16(84.2%)、「どちらともいえない」が 3(15.8%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「事前に事実を記録することの負担感はあるが、障害特性や強み、環境の快・不快、好影響・悪影響などの細かなデータを整理できた」「利用者について理解できていたことと理解できていなかったことの気づきにつながり、記録収集後の支援の組立を広い視点で行えた」、「根拠を持ってアセスメントに取り組み、全体ではなく

場面毎に強みを見いだす新しい視点が得られた」旨の内容が得られた。また課題コメントの要約抜粋として「設問が利用者の状況・状態に合わなかった」、「新たな環境要因や特性、強みなどの発見は今回なかった」旨の内容が得られた。

Q 2.「支援課題が具体的になったかどうかについて教えて下さい」については、「効果的(9)・少し効果的(4)」は合わせて 13(68.4%)、「どちらともいえない(5)・あまり効果的でなかった(1)」は合わせて 6(31.6%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「日常生活の中で出来事を入力したことで支援課題が明確となり、支援の焦点も絞り込みやすく、具体的な支援計画の作成につながった」、「ICF の作成により本人のことや本人の課題を細かく考えることができ、補足情報を記入することで課題が浮き彫りになり、支援計画も具体的になった」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「支援が足りない部分は確認できたが、支援計画は ICF の活用よりもこれまでのノウハウ(視覚化など)で立案した」旨の内容が得られた。

Q 3.「支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えて下さい」については、「効果的(7)・少し効果的(8)」は合わせて 15(78.9%)、「どちらともいえない(5)・あまり効果的でなかった(1)」は合わせて 4(21.1%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「分類項目が詳細なため改めて本人の情報整理につながり、同一の指標を他職種の視点で記入することにより多角的に利用者の支援状況をまとめられた」、「今後の支援でも活用できると思う」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「情報収集はしやすいが入力に手間がかかるため、時間に余裕がないと充実した記載は難しい」、「但し一旦ベースとして作れば累積記録として毎年積み重ねていくのは実用的である」旨の内容が得られた。

Q 4.「関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えて下さい」については、「効果的(5)・少し効果

的(7)」は合わせて 12(63.2%)、「どちらともいえない(6)・あまり効果的でなかった(1)」は合わせて 7(36.8%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「事業所で使用しているワークシートと同様の役割があつて有効であり、フォームや記入方法がある程度一本化されているため、共有はされやすい部分は見られた」、「視覚的に支援が足りない部分をまとめて表示されるため部分的な情報共有はしやすかった」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「ICF 全体の情報を共有するには項目の量が多くすべてを見て把握しているスタッフは少なかった」、「職員間の情報共有まで至らなかった」旨の内容が得られた。

Q 5.「記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えて下さい」については ICF システムと合わせてアセスメントパッケージを構成する Observations2(Observations の改訂版)に係る回答のみであったため省略する。

Q 6.「支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えて下さい」については、「効果的(7)・少し効果的(8)」は合わせて 15(78.9%)、「どちらともいえない」が 4(21.1%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「入力内容がカテゴリー別に分けられるためとても分析しやすく、支援計画に効果的である」、「ICF システムがあれば若手でもベテランでもさほど大きな差が出ないと感じた」、「アセスメントの視点を養うためには有効」「複数で一緒に記入して討論したので情報共有につながった」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「記録に基づいて分析の工程まで進めなかった」、「結果は入力次第で、入力がおざなりにされると分析も中途半端になる」旨の内容が得られた。

Q 7.「試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えて下さい」については、「効果的(8)・少し効果的(8)」は合わせて 16(84.2%)、「どちらともいえない」が 3(15.8%)であった。

## 2) 試行調査（二次調査）のアンケート結果

意見交換会と並行して実施した二次調査（令和3（2021）年10月～令和4（2022）年1月）については本研究で開発しているパッケージの研修と実践に係る意見交換会への参加を希望する事業所29箇所を対象とするアンケート調査の結果概略（令和4（2022）年2月1日現在）は以下の通りである。回答方式は「効果的・少し効果的・どちらともいえない・あまり効果的ではなかった・効果的ではなかった」の5段階リッカートで、調査対象26名（途中で3事業所が辞退）のうち25名から回答が得られている。但し、リッカート評価はアセスメントパッケージ全体への回答であり、コメントはICFシステムに関わると思われる内容のみを取り上げている。

Q1.「利用者の障害特性や強み、環境要因等の把握・整理が行いやすくなったかどうかについて教えてください」については、「効果的(9)・少し効果的(14)」は合わせて23(92%)、「どちらともいえない」が2(8%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「ICFシートでは入力した情報が本人の強みや支援の維持・調整、支援の修正、支援の考案といった項目に整理されて示されるので、全体像が把握しやすかった」「項目が決まっているのでそれについて詳しく話し合えることで意見が出しやすかったので把握しやすかった」、「シート自体は非常に有益なものだと感じた」「ICFシートの記入によって、本児を見ているようで見ていないことにまず気づいた」「環境設定等は難しいと思っているところもあったが、この子のことをシンプルに考えることができると、自分たちの頭の中も整理できたように感じる」旨の内容が得られた。また課題コメントの要約抜粋として「重度の知的障害のある利用者については効果が限定的だと感じた」、「ICFシートは客観的な整理ができるが、私自身、馴染みがないため、他職員への活用方法や考え方などの整理を十分に伝達できなかった」旨の内容が得られた。

Q2.「支援課題が具体的に変わったかどうかについて教えてください」については、「効果的(12)・少

し効果的(5)」は合わせて17(68%)、「どちらともいえない」は8(32%)であった。「あまり効果的でなかった」以下の回答はなかった。効果的コメントの要約抜粋として「支援効果の大小が分類分けされる為、介入が必要なポイントや支援内容の見直しでクリアできる課題行動など、分かりやすくよい」、「支援を実施していない部分は、焦点が当たっていない（わかっていない）部分でもあったので、焦点化されよかった」、「障害特性、環境要因どちらに偏ることなく自然と目を向けることができた（冰山モデルシートについて）」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「ICFへの理解が深まらずそこから具体的な支援につなげることは難しかった」、「支援課題については、支援計画に具体的に落とすところも課題になってくると思われる」旨の内容が得られた。

Q3.「支援者が支援に必要な利用者情報や記録の収集が行いやすくなったかどうかについて教えてください」については、「効果的(8)・少し効果的(11)」は合わせて19(76%)、「どちらともいえない」は6(24%)であった。「あまり効果的でなかった」以下の回答はなかった。効果的コメントの要約抜粋として「一人の利用者に関しての必要な情報を集めるということでは非常に効果的であったと感じる」、「ICFシートの書式は、「活動と参加」に関しては実際の支援現場での様子を具体的に入力することで、支援員の経験年数には関係なく情報の収集ができる」、「ICFを使うことが初めての作業で手間と戸惑いを初めは感じていた。完成した後に見直すとしっかりと情報収集ができていたのかと思われる」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「「環境要因」に関しては、ご家族からの情報も必要なので時間がかかった」、「(本研究について)ご家族や支援現場に説明することに少し困難さを感じた」旨の内容が得られた。

Q4.「関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうかについて教えてください」については、「効果的(6)・少し効果的(7)」は合わせて13(52%)、「どちらともいえない」は12(48%)であった。「あまり効果的でな

かった」以下の回答はなかった。効果的コメントの要約抜粋として「ICF シートのように基準となる書式があると、利用者情報が整理される」、「ICF シートが共通のツールとして活用できれば、情報共有がスムーズにできるのではないかと期待できる」、「支援員間で受け取り方に差異がある為、各支援員の思考を客観的に知ることができた」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「事業所数が増えた場合、ICF システムの作成や支援者会議の持ち方もさらに技術が必要になると思う」、「(情報収集後に) 考え方や情報を揃える段階で難しさを感じている状況がある」、「ご家族と疎遠の方が多く在園されている為、情報収集が難しい事例も多いと感じる」旨の内容が得られた。

Q 5. 「記録に係る負担感の軽減が図れたかどうかについて教えてください」については ICF システムと合わせてアセスメントパッケージを構成する Observations2(Observations の改訂版)に係る回答のみであったため数値データは省略する。効果的コメントの要約抜粋としては「共有できるシートという強みは感じている」、「一旦できてしまえばあとは見直しをすればよいだけなので、既存のシートをこちらにスライドしていくことも可能と考える」、「児童からの成人への引き継ぎの際に ICF シートを基に行えるととてもよい」旨の内容が得られた。課題コメントとして「ICF シートの記録についてはやはり項目数が多いことと、問われている内容の表現に難しさがあること、馴染みがないこともあり、負担感としては大きく感じた」、「今回のデータで業務量は多くなったと感じた」旨の内容が得られた。

Q 6. 「支援に必要な利用者情報および記録等の分析がしやすくなったかどうかについて教えてください」については、「効果的(9)・少し効果的(9)」は合わせて 18(72%)、「どちらともいえない(6)・あまり効果的はなかった(1)」が合わせて 7(28%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「ICF コアセット回答分析は操作などで慣れが必要だが分析しやすい」、「項目毎に分かれていたため必要なものを選びやすかった」、「ICF シートでは、強

みや支援の継続、修正などに分析できるため、どの部分にスポットをあてて考えればよいか分かりやすかった」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋については、明確に ICF シートに関すると考えられるものはなかった。

Q 7. 「試行調査で実施した本パッケージ全体に関する評価について教えてください」については、「効果的(6)・少し効果的(13)」は合わせて 19(76%)、「どちらともいえない(4)・あまり効果的ではなかった(2)」が合わせて 6(24%)であった。効果的コメントの要約抜粋として「ICF シートは、障害特性や環境要因の把握に効果的であった」、「いまの生活の質を考える、という ICF の視点かがとても素晴らしいと感じる」、「決まった形に添って進めて行けば支援改善が望めるというのはとても画期的だと感じる」旨の内容が得られた。課題コメントの要約抜粋として「ICF の観点を捉えるためのスキルが必要なため、記入に関しての研修が必要」、「ICF シートの作成がより簡素されれば活用できる」、「重度の場合には強みがないので、支援に繋ぎにくい」旨の内容が得られた。

## 2. 意見交換会で得られたコメントの概略とその結果

第2回(令和3(2021)年11月29日実施)および第3回(令和4(2022)年1月13日実施)の意見交換会で得られたコメントを肯定的内容と否定的内容に分類した後、コメントがどのような内容を含むのかについて共通カテゴリーへの該当数をカウントすることで検討した。コメントは複数文で構成されるため、一つのコメントに対して、複数のカテゴリー該当がある。以下、第2回および第3回の肯定的・否定的コメントに係る分析結果を示す。なお、第2回意見交換会は ICF システムを活用した情報把握に着手し始めた時点で実施され、第3回意見交換会はその情報把握が完遂し、把握した情報の整理と見直し、事業所によっては、支援会議が開催され、2回目の情報把握が進捗している段階で実施されている。

### 1) 第2回意見交換会の肯定的意見



表1 第2回意見交換会(令和3年11月29日)で得られた肯定的コメント

効果・肯定的な意見	情報整理	客観性	課題把握	網羅性	本人理解 実態把握	共通認識 情報共有	支援に有用	アプリ 利便性	経験の 不問化
・共通体験として、利用者の状況を把握していない、もしくは把握している者の支援が入っていない点が浮き彫りになり、現状把握について有効だった。			1		1				
・食べ物への執着は促進・阻害の両面に影響していることが把握できた。			1		1				
・活動と参加はスムーズに書くことができた。									
・入所施設なのだが、普通の生活を送っていないことを振り返る機会となった。					1				
第2回意見交換会 各カテゴリーに該当する肯定的コメント (複数該当あり)	情報整理	客観性	課題把握	網羅性	本人理解 実態把握	共通認識 情報共有	支援に有用	アプリ 利便性	経験の 不問化
	0	0	2	0	3	0	0	0	0

2) 第2回意見交換会の否定的意見

表2 第2回意見交換会(令和3年11月29日)で得られた否定的コメント

課題・否定的な意見、疑問	労力・時間 コスト	書き方 判断基準等	要研修	シート構成の 利便性	チーム活用の 難しさ	適用の 課題
・協力・共同がどのくらいできているか？の判断が難しかった。		1				
・「活動と参加」をどこまで書けばいいか？例えば健康維持は施設だと保たれているので、本人自身が何をどこまで、というのが難しかった。		1				
・実際の仕方は、各部署で記入し、それをすり合わせて清書したので、時間がかった。	1					
・(食べ物への執着は促進・阻害の両面に影響していることが把握できた。)しかしそれをどのように支援の調整に活かしていけばよいのか？					1	
・人数を広げていくとまとまりがなくなっていく。二人で記入したが感じ方が違う。		1				
・ICFシートは全体像をつかむシートで、純粋に項目に関する答えを記入すると考えるが、問題行動を頭に浮かべて記入しがちになってしまっている現状がある。		1				
・ICFシートは全体像をつかむシートで、純粋に項目に関する答えを記入すると考えるが、問題行動を頭に浮かべて記入しがちになってしまっている現状がある。記録の重要性を現場の職員に上手く伝えられない。余計なことを職場に持ち込むと言う雰囲気がある。メリットを伝えることが難しい。	1	1			1	
・記録をどう風に運用していくのか？ 普段の支援につなげて行く方法					1	
・環境要因については、重度の施設入所者は体験や経験がなく、詳細不明・被害等が多い。結果につながるのか？						1
・認定調査の項目に近く、趣旨や判断基準がちがうので困った		1				
・環境要因は難しく、書いている内容が妥当かどうか自体が不安だった。		1				
・一年目の職員は記入が難しい			1		1	
・記入の基準があるとよい		1				
・質問項目に対してより具体的にしてもらえるとよかった。		1				
・例えば「目的」を持って行動できるではなく、スケジュールがあれば等の具体的な表示。		1				
・質問内容が大枠で重複している場合には、同じ答えを書いてよいのか？		1				
・一次チェックの担当者が経験の浅い人と難しい(当該担当者も二次チェック者も大変になる)	1		1			
・対象者が高齢の人の場合も情報がとりにくく難しい。						1
・主観で書くスタッフがいたとき、2次チェックが大変になるので、職員研修など底上げも同時に必要ではないか。		1	1			
・どこまで具体的に記入したらよいのか？		1				
・支援員によって行動が変わるので、どこまで記載したらよいのか分からない。		1				
・支援員3名で記入する予定だが、タイミングが合わず、進んでいない。今後、やり方を見直す必要がある。					1	
第2回意見交換会 各カテゴリーに該当する否定的コメント数 (複数該当あり)	労力・時間 コスト	書き方 判断基準等	要研修	シート構成の 利便性	チーム活用の 難しさ	適用の 課題
	3	14	3	0	5	2

### 3) 第3回意見交換会の肯定的意見

表3 第3回意見交換会(令和4年1月13日)で得られた肯定的コメント

①パッケージの有効と感じた点	情報整理	客観性	課題把握	網羅性	本人理解 実態把握	共通認識 情報共有	支援に有用	アプリ 利便性	経験の 不問化
[ICF] ・アセスメントは項目の多さはあるものの、支援をしているのか、していないのか、効果があるかないかを整理できるので、課題を見つけやすかった。	1		1						
[ICF] ・主観ではなく客観的に情報を整理できる。 ・項目が整理されていることで漏れなく情報を確認できる。	1	1		1					
[ICF] ・客観的な分析ができるので、本人の強みや弱み、支援の不十分な点などがよく分かり、新たな支援を考える上で参考になった。 ・項目が多く、作成には時間がかかったが、支援員やご家族からの情報を集め、話し合う過程がとても大事なのだと思った。今までのアセスメントの不十分さを感じた。			1		1	1	1		
・ICFシートについて、自分の事業所で行なっているものよりも、細かく項目にわかれていたため、記入するのに時間はかかったが、改めてメンバーのことをアセスメントできたり、ソフトを使うことで情報もまとめられたので、見直したり、振り返るのがとてもやりやすかった。	1			1	1			1	
・ICFを利用し、利用者の状態や様子等をつかみやすくなった。 ・長期での記録として残すことができ、現在のアセスメントの材料や過去にさかのぼる資料としても活用できるデータベースとしてもできることがよい。 ・データがとても取りやすかった。					1		1	1	
・ICFシートを入力していくことで利用者の実態を把握することができ、問題となる行動以外の支援にも活かせる。					1		1		
・ICFを通して直接支援をする職員の間に関わらず利用者さんへの共通認識がしっかりと行え項目毎の具体的な例から統一した支援につなげやすかったのが大きい ・簡単な入力で問題の視覚化が可能になり職員間で状態を共有しやすい。						1	1		1
・ICFシートの記入を通じて、対象利用者のことをICFの視点からアセスメントすることができ、客観的にとらえることができた。 ・「(ICFシステム+行動観察システム)→氷山モデル→支援手順書」というフォーマットがあることにより、「根拠に基づいた支援」を組み立てることができた。「勘と経験」に頼るのではない、支援の組み立て方の指針となるものだと思う。		1					1		1
・ICFシートについては、様々な職員で作成することによって、当事者の全体像を共有できると思われる。 ・オブザーベーションシート、オブザーベーション2については、記録がグラフや表となり視覚的に見られる事は良かった。					1	1			
・ICFシートは事業所内、他事業所との共通の認識を持って本人と関わることができるツールとなり得る						1			
・ICFシステムは使用することで、生活機能から障害を捉えるという視点を持つことができた。ICFシート記入後はデータが分類分けされるため、手作業で行う必要がなく利便性が高いと感じた。一度作成すれば定期的な見直しで済むので、最初の記入さえ頑張れば有効なシートと感じる。	1				1		1	1	
○ICFシートについて ・入力に時間がかかかと思うが、完成すれば精度の高いものになるのではと思う。 ・解説があるのはいい(解説内容はともかくとして) ・入力エラーがわかりやすい点もよかった。				1				1	
・使用方法も難しくなく、全職員が使いこなすことができれば、時間の短縮になり、グラフ化できるので有効だと感じた。 ・ICFシートについては、解説があり、間違いが分かるようになっているのは分かりやすかった。 ・実際には行っていないが、他事業所と情報共有できる点はいいと感じた。						1		1	
・ICFの項目を埋める上で、知らない部分も多く、自身の情報の少なさを実感した。 ・チームで進めることで、思いや考え方を共有できる。 ・パッケージがあることで、支援の難しい利用者対応で行き詰まりが解消できる可能性がある。				1		1	1		
・対象者のことを分かっているつもりだったが項目を見るごとに違う視点で対象者を見ることができると知り、改めて対象者のことを深く掘り下げることができる。強みを知ることにつながる。 ・対象者のことを知らない人が見てもその人がどんな人なのか簡単ではあるが知ることができると。 ・チームで情報を共有することができる。客観的に見ることができるのは各関係機関や保護者とも情報の共有がしやすい。		1			1	1	1		
・シートを埋める上で知らない部分や背景が見えた。同時に会議など行うことで修正や新たに追記したところなどあり、情報をアップデートできた。 ・行動などの記録を簡単に打てる、かつ、まとめられる。データがある上で支援や情報提供などうまく活用できた。				1	1	1			
・詳細に検討すればするほど新たな気づきがあり、アセスメントを深めることができる。 ・支援手順書や新たな支援方針に生かすことができる。そのベースになる。 ・アプリ(Observations)により、状況・記録がすぐわかり医師との連携もしやすいと思われる。			1	1	1		1		
・ICFコアセットを利用し、それまで利用者の状態像を客観的に記録できるようになった点。以前だと担当の主観が入ったり、チームでの共通認識としての状態像を記録として残すことが難しかったが、今回一度作成することで今後の支援を考える上でのベースになると考える。			1			1	1		
・改めて、本児を客観的にみることで、気づくことがたくさんありました。そのことを、スタッフと共有するきっかけにもよったと思います。普段から、氷山モデルの考え方で子どもたちを見てきましたが、支援手順書にまで落とし込むことはしおらず、書き出して共有する必要性を感じました。			1		1	1			
・ICFを打ち込むことで改めて気づけることもあり、支援手順書に新たに生かせたり、ためてみたいことが見つかった。			1		1				
・ICFシートでは、見るべき視点が分類されているため、アセスメントを深めることができたり、抜けていた部分を補えたり、「参加」では新たにご家族と情報共有をするきっかけとなった。 ・支援員間での情報の共有が具体的にでき、またベテランの支援員が見ている視点も知ることができ、経験の浅い支援員の人材育成につながると思った。 ・データ解析で、修正が必要な部分と介入していない部分等を分類できるため、個別支援計画書を作成する際に有効であると感じた。 ・ICFシートで分析された視点を元に焦点を当てて支援が考えやすくなった。			1	1	1	1	1		
・ICF分析で「強み」や「配慮すべき点」が見えることが良かった。 ・今まで気づけなかった新たな強み等が見つかった。			1		1		1		
・当法人が使用している個人情報シートと比較しても、ICFシートは細かに項目が分類されており、それを明確に記載することで、本人の行動面などの状態像を知る上で有効と思われる。また、両者のデータを整理し、組み合わせられたものができたら、より支援に活かせるのかもしれない。 ・今後、当施設で各利用者の担当支援員がICFシートを記入し、それを支援員間でチェックしあうことで、支援を行う際、どのような部分に配慮が必要なのかなどを、より細かに知ることができる。 ・支援上、本人の活かし点、支援を行っていく部分について、表を確認しあいが進めることで、より根拠を示すことができる。	1		1	1	1	1	1		
・ICFシートについて、施設独自のものより細かく項目が分類されていて、利用者さんのことを改めてもつと知ることができました。 ・施設入所履歴が長い利用者にとっては、経験したことがない項目が多かったことに気づき、利用者体に体験させてみようと思え、支援に活かせるようになった。				1	1		1		
第3回意見交換会 各カテゴリーに該当する肯定的コメント数 (複数該当あり)	情報整理	客観性	課題把握	網羅性	本人理解 実態把握	共通認識 情報共有	支援に有用	アプリ 利便性	経験の 不問化
	5	7	5	9	15	12	14	5	2

#### 4) 第3回意見交換会の否定的意見

表4 第3回意見交換会(令和4年1月13日)で得られた否定的コメント

②パッケージの課題と感じた点	労力・時間 コスト	書き方 判断基準等	要研修	シート構成の 利便性	チーム活用の 難しさ	適用の 課題
[ICF] ・すべて書くのには時間がかった。チームで取り組むのが大事だと思うが浸透するまでは難しいかもしれない。書き方は練習と理解を深めていく必要がある ・ICFシート作成のみの勉強会などあってもいい	1	1	1			
[ICF] ・入力は簡易的であっても、その後の分析ツールへのアップロード等、実際に使用するには手間がかかり、誰でもあってもできるものではなかった。 ・入力のための労力と時間がかかる（個人的にはパソコンよりもスマホから入力できると簡単）。	1			1		
[ICF] ・シートの種類が発達年齢を基準にされていたが、明確な基準がないと選びにくかった。支援現場では、利用者を必ずしも発達年齢で捉えてはいない。利用者の実年齢で対応するように心がけている。 ・初めに17歳以上で入れてしまい、その後6-16歳で入れ直したが、分析結果に大きな違いは出てこないように思えた。		1				
・職員の取り組み姿勢(やる気)が現場と自分とで差が大きかった(世話人に伝えないと他職員は動かないがその世話人がまた他のGH応援でほぼ不在の状況)。チームとして参加する事の重要性を説くことが難しかった。					1	
・ICFシートについては、施設に入所されている重度の知的障害の利用者だと該当しない項目や判断に迷う項目が多かった。(だからこそ施設入所という生活の場が「普通」ではない、ということもあらためて感じたのではあります)						1
・ICFシートについては、様々な職員で作成することによって、評価が違うことで、イメージがつかづらいいこともあると思われる。例えば、A職員は課題行動として評価し、B職員は、こだわり行動として評価するなど。		1			1	
・基準を設けても課題行動に対する評価(頻度、強度等)の統一性を保つのは、人数が多くなる程難しいと感じた ・シートが複数あるので、作成する者への負担増は避けられない		1			1	
・ICFシートについても、記入するにあたって求められるレベルが高いと感じる。13年従事している自分であっても記入に困ることや、主観で記入してしまうこともあった。しっかりしたものを仕上げようとすると、ハードルは非常に高いと思う。			1			
ICFシートについて ・困難あり、なしの2択で間がないのが記入しづらい ・支援あり、なしの2択で間がないのが記入しづらい 一部ではあるが・・・ということが多い ・複数の支援方法(一部は介助、一部は構造化など)の場合の書き方は? ・ストレスが高い、難しいので設定をしていない(場面を避けている)時はどう書くかがわかりづらい ・質問内容が広範囲(ににおい、触覚がまとめられている、「活動」を一人でする など)で答えにくい ・解説があるので助かるが、例えば答えにくい ・「③支援の効果」の内容をどう書いていいかわからない		1	1	1		
・ICFシートを作るのに時間を要する。また、職員によってとらえ方も違うため、見直しをする職員に負担をかけてしまう。	1	1				
・作業量が多い→理解度の高いスタッフ、3名1チームぐらいの小グループがまだやりやすかった ・アセスメントは各法人独自のものがあるため、今後の使用イメージがつかづらいい、→すべてのプロセスを流用するよりは、プロセスを理解し補うイメージで進める。		1			1	
・他職員にお願いするのは業務を増やしてしまうことになる。 ・パッケージをどう活用し、今後運用していくのかを上司にプレゼンするためにそれに合った労力と結果を求められてくるかなと思った(予算も必要なので)。 ・支援者によって価値観、視点が違うためそれを統合する作業やバランスが難しい。	1	1			1	
・単純に作業量、仕事量が多くなるためスタッフに担ってもらうのは心苦しいです。	1					
・パッケージの内容をしっかりと文章化し充実したものにするには、知識と経験による専門性ある支援者が必要だと思った。書き手により有力な情報か、平易なのか差がある。(ウイスクIVの所見といっしょで、書き手の専門性によって差がでると思った。) ・パッケージの中身を理解して、活用できるくらい支援スキルが必要。 ・心理的支援一つにしても奥が深い。しかし昨今は行動療法と視覚支援が軸になっているので、特に心理的支援が浅薄だと感じる。 ・感覚統合やディスクレシアなどに対応した学習支援にも熟知していないと、パッケージを十分に活用できないと思った。 ・特別支援教育士の知識なども大いに役立つと思った。 ・前向きに活用するためのリーダーシップ・マネジメントが必要。			1	1		
打ち込み作業等、できる人が限られているので、紙に書き出してそれを私が打ち込んでいました。	1					
・ICFシートへの記入や支援会議を通じて、ある程度支援員の知識がないと内容が難しいと感じる。 ・ICFシートを支援員で役割分担して記載したが、支援の効果の判断が支援員で差がある。そのことで、解析した場合に修正が上がってこない項目があった。 ・分量が多く項目ごとに関わっている内容もやや分かりにくい表現でもあり、現場になじませるには相当なパワーが必要。個別支援計画、モニタリング、支援会議、日々の記録、その他法人業務等あるなか、どうシステムとして入れ込むか。 ・他の人が出してくれた支援の「大」「小」が、自分の印象と異なり、すりあわせや意見の活用をする事の難しさがあった。みんなの意見も大事にしたいため、その辺が統一できるようなわかりやすい設問であつたらよかった。	1	1	1			
・ICFシートについて： 難しい言葉や内容であったため、わかりづらいという意見が多く聞かれたため、ベテラン職員に協力依頼するしかなかったことから、 ①理解できる支援員が限定される ②当施設ではほとんど区分6のコミュニケーションが困難かつ強度行動障害を有されている方々が多く在籍されており、判定後の強みがゼロ(ない)と出た時、正直衝撃でした。強度で重度の方々を支援してきた(さん)強みを発揮してきたつもりですが、ICFシートでは、強みが出せなかったことが残念でした。当施設には向いていない資料なのか(自分があまり理解していないことが原因か)と思いましたが、氷山モデルのツールに落とし込んでからの支援のアイデアは、これまで利用した経験があつたため色んな職員の意見が盛り込まれた内容になった。 ③もう少しわかりやすいsheetであれば、だれでも入力できるのではないかと感じました。		1		1	1	1
・今回、複数名の支援員にICF情報入力シートの打ち込みをしてもらったが、個人により内容の差が非常に出ていた(これは当施設の各支援員スキルの問題でもあるが)。 ・項目の質問事項自体がわかりづらいい意見もあつた。見本みたいなものがあると、ある程度の支援員でもスムーズに打ち込みができると思われる。		1	1			
・ICFシートについて、言葉が難しく表現されていて、どのように理解した方がいいのか迷うことがありました。支援者によって、理解度や受け取り方がばらばらなので、まとめる方としては難しいと感じました。		1	1			
第3回意見交換会 各カテゴリーに該当する否定的コメント数 (複数該当あり)	7	13	7	3	6	2

## C. まとめと考察

### 1) アンケート調査のまとめ

一次調査と二次調査の対象は、前者は一定程度の良好な支援を担保していることが見込まれる事業所である一方、後者はいわゆる平均的な支援を反映する事業所であった。この調査設定は、本研究で開発しているパッケージを普及する上でのICFシステムに係る課題を把握するというのも目的としていたが、一次調査と二次調査の結果には全体として大きな差は認められなかった。加えて、アンケート調査の結果は概ね肯定的評価が優勢であり、ICFシステムの強度行動障害における有用性を示唆するものであった。このことは本研究で開発を進めているパッケージを構成するICFシステムが事業所の支援状況によって、その有用性が左右されるものではなく、普及することによる支援状況の向上を見込める可能性があることを示唆している。設問の中で差が認められたのはQ4「関係者間での利用者情報や支援に関する情報共有が行いやすくなったかどうか」であり、この設問については、二次調査で肯定的回答の割合が低下した。事業所内外での情報共有の行いやすさについては、当該事業所全体としてシステムティックに支援を展開しているか否かに影響を受けるため、支援の質によって結果が影響を受けた可能性がある。またアンケート各設問の自由記述回答も、両調査で大きな差はなく、肯定的評価としては「利用者のことが多角的かつ具体的・詳細に理解できる」、「支援を組み立てやすい」、「経験を問わない情報収集」、「分析の結果が分かりやすく活用しやすい」旨の回答が得られた。一方、課題的評価としては「入力に手間がかかる」、「重度の利用者については効果が限定的」、「ICFシート記入の研修が必要」旨の回答が得られた。

### 2) 意見交換会のコメント分析のまとめ

意見交換会で得られたコメント分析は第2回と第3回の肯定的回答で大きな変化を示し、第2回では肯定的意見が5回答のみであったのに対し、第3回では74回答と大幅に増加した。一方、否定

的回答は第2回では27回答、第3回では38回答と若干の増加であった。この変化は、第2回意見交換会の実施がICFシステムによる情報把握を開始した頃である一方、第3回意見交換会の実施が、情報把握の完遂、把握情報の整理と見直し、支援会議開催の後であることによると考えられる。ICFシステムは、項目数が多く労力がかかると感じることで、ICFによる情報把握の考え方に馴染みがないこと、等により、肯定的な評価が即座に得られるものではない。しかし、実際に支援対象者の生活情報を支援関連情報や環境要因と併せて網羅的に収集することにより、支援対象者の理解が深まり、生活実態から支援を立ち上げていくことができるとの体験ができた段階で、ICFシステムの評価は肯定的なものとなっていくと思われる。実際、第3回意見交換会におけるコメント分析のカテゴリ分布は「本人理解・実態把握」(15回答)、「支援に有用」(14回答)、「共通認識・情報共有」(12回答)の3つが上位を構成しており、「把握された本人の実態・理解が情報共有されて共通認識となり、有用な支援に行き至った」という繋がりを示唆している。併せて4位以下の「網羅性」「客観性」「情報整理」「課題把握」についても「客観的で網羅的な情報が把握・整理されて課題が見えてくる」というICFシステムの特徴を反映する回答結果であったと思われる。

一方、否定的回答については第2回と第3回でほぼ同様のカテゴリ分布であり、両回とも「書き方・判断基準等」の難しさが最も多く「労力・コスト」「チーム活用の難しさ」「要研修」が続くという結果となっている。先述したように、ICFによる情報把握の観点とは異なり、生活実態そのものにおける個人の振る舞いと関連する環境要因(支援アプローチも含む)をセットで捉えるものである。このことがICFシステムによる情報把握観点のわかりづらさとなっていると思われる。また、情報把握を行う支援者によって捉え方が異なる場合があるという状況そのものが、チーム活用の難しさとの評価につながっていると考

られる。

しかし、支援を必要とする利用者の振る舞いは、場面によってその現れが変わるからこそ、支援の難しさも生じてくるということがある。そのことを考えると、支援者の捉え方をすり合わせて「単一の利用者像」を描くことよりも、「場面によって振る舞いに変化するダイナミックな利用者像」を共有することこそ支援の手がかりがあるという「背景因子を擁する ICF の観点」を研修で伝えていくことの必要性が示されているとも考えられる。

### 3) 全体の考察

ICF システムに関して、一次調査および二次調査のアンケート調査、そして、二次調査の対象事業所が参加した意見交換会の第2回・第3回のコメントを分析したが、全体としては一貫した結果が得られたと考える。

今後、今回の研究で得られた ICF システムの有用性と課題を通じて、ICF システムの改良を検討していく必要がある。

### 4. 本研究について

本稿では、本研究のアセスメントパッケージを構成する ICF システムに焦点を当てて、研究結果をまとめてきた。しかしこれは本研究が提案するアセスメントパッケージを構成する一面であり、また別の一面としては、問題行動の行動分析から支援構築を検討する Observations がある。問題行動の背景には、当該の問題行動が生じることに直接関係し誘発する環境要因が存在することは明らかであるが、その環境要因は、広く生活場面の中に埋め込まれており、その意味で、広く生活場面全般における支援対象者の行動を環境要因との関連の中で捉え、安心できる過ごしやすい生活を提供することが支援の大きな背景を為すことは、問題行動に対する支援アプローチと齟齬するものではない。その観点から、本研究が提案するアセスメントパッケージの有用性を、現場実践の中で捉え返し、位置づけていくことが今後必要である。

厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)  
(総合) 分担研究報告書

強度行動障害支援者養成と現場を支えるために必要なことは何か

分担研究者： 井上 雅彦<sup>1)</sup>

1) 鳥取大学

**研究要旨**

本研究の結果を踏まえて、支援者養成と現場を支えるために必要なことは何かについて今後の課題を述べる。ICF（国際生活機能分類）については、導入に対して肯定的な評価が得られた反面、膨大な ICF の評価項目の中で、どの項目に注目して支援に活かすかという知見が得られると実用性の向上につながると考える。行動関連アプリについては、現場での ICT の活用はある程度なされたが、デバイス機器の活用や管理などのルール整備に課題を持つ事業所もあり、事業所全体での研修や導入が必要であると考えられた。パッケージ全体の有効性についてはおおむね肯定的な結果が得られたが、利用者の行動改善への効果、職員の支援技術の向上やメンタルヘルスの改善にどれだけ寄与するかは今後の課題となる。

**A. はじめに**

自閉スペクトラム症(以下 ASD)をはじめ知的障害のある人における行動上の問題は、社会適応に大きな障壁をもたらす。Matson ら (2011) は、ASD 児のレビュー研究から 13~30%がなんらかの問題行動を示し、知的障害および ASD を合併する成人では、87.9%がなんらかの問題行動に関与することが指摘している。ASD や知的障害のある人の問題行動の治療のため、現在に至るまで多くの研究が行われてきた。

研究として示されたエビデンスに基づく介入が実際の地域の事業所によって実装され、効果を生むためには、実施しやすいアセスメントとそれに基づくプログラムやツールが提供される必要があり、かつプログラム自体のフィディリティ（介入の厳密性）を高めるための研修が必要となる。

今回の研究は、評価システムの一つとして ICF による障害の考え方をベースとした評価と ICT の活用として Observations などの行動記録のためのアプリケーションを取り入れた。また支援会議と氷山モデルシートを活用して、現場での実践をサポートすることを目指したものである。本報告では本研究の結果を踏まえて、支援者養成と現場を支えるために必要なことは何かについて今後の課題を述べる。

**B. ICF 評価について**

ICF の評価が導入されることは、強度行動障害に限らず、生活の質の改善を目指すあらゆる支援の視点として重要なことである。導入に対して一般的に肯定的な評価が得られた反面、いくつかの課題も散見された。今回は強度行動障害という緊急性の差し迫った状態像が生じた対象者を評価するものであり、このことが項目の多さや入所施設という限定された環境における活用などの評価につながったのではないかと考えられる。幼児期、もしくは最初の福祉利用時からこのような ICF 評価がなされていれば、強度行動障害という状態での支援計画の策定という「活用」に焦点化した分析が可能であったのではないかと考える。例えば強度行動障害の場合、てんかんに対する医療的対応について取り上げ、支援者間で共有し、指導計画立案に際しては「強み」の部分に着目して代替行動を設定するなど、膨大な ICF の評価項目の中で、どの項目に注目して支援に活かすかという知見が得られると実用性の向上につながると考える。

**C. 行動関連アプリについて**

地域での実践において、日常場面における正確で客観的な行動記録は、その実践の有効性を測るとともに、修正・調整していく際の重要な手がか

りとなる。しかしながら現場スタッフが対象となる行動を日々正確に記録することは必ずしも容易ではない。Mozingo, et al. (2006)は、入所施設におけるスタッフの問題行動の記録頻度の精度を高めるためのスタッフトレーニングと管理パッケージを実施し、その有効性を示している。今回はこの研究と同様、アプリというツールを用い、かつその操作方法について動画や講義を活用しての研修の機会を設けた。これにより、ある程度現場での ICT の活用はなされたと考えられるが、支援計画の修正や改善にどのように寄与したかに関しては未知数であり課題を残した。

クラウド上での情報共有などアプリ自体の機能面の課題もあるが、デバイス機器の活用や管理などのルール整備に課題を持つ事業所もあり、事業所全体での研修や導入が必要であると考えられた。

#### D. パッケージの有効性について

パッケージ全体の有効性については、短期間で少ない回数の実施ではあったが、参加者のアンケート調査においてはおおむね肯定的な結果が得られた。しかしながら本パッケージの有効性として、利用者の行動改善への効果、職員の支援技術の向上やメンタルヘルスの改善にどれだけ寄与するかは今後の課題となる。

例えば、参加者の事業所が担当している利用者の行動障害の状態像に関する ABC-J や BPI-S などの評価、参加者の精神健康度などの心理面・知識面の評価などが事前事後でどのように変化するかを評価していくとよい。また、アプリによる行動の生起頻度を測定した場合のターゲット行動の変化、支援会議の中での発言や内容の変化、時間の短縮などを効果指標として再度検討していく必要がある。

#### E. 行動コンサルテーション

行動コンサルテーションとは、応用行動分析や認知・行動療法の考え方に基づく間接援助モデルであり、多くのエビデンスが示されている。本研究のような各事業所の代表が参加する研修プロ

ラムにおいて課題となるのが、受講者が研修の内容を現場でいかに実行できるかという点である (Inoue, et al. 2021)。このような組織環境自体のアセスメントや体系的な介入としての行動コンサルテーションの技法を取り入れていくことでの効果についても今後の検討課題となる。

#### F. 機能的アセスメントへの展開

海外で行動障害に対して最も高いエビデンスを示す「機能的アセスメント」は、医療、心理、福祉、教育などに幅広く取り入れられており、米国では IDEA (Individuals with Disabilities Education Act) 「障害のある個人教育法」の中に行動介入計画とともに義務付けられ、英国では NICE (National Institute for Health and Care Excellence) の 2015 年のガイドラインである Challenging behaviour and learning disabilities: prevention and interventions for people with learning disabilities whose behaviour challenges 「行動問題と知的障害: 知的障害のある人の行動問題における予防と介入」などによって制度的にも広く公表されてきている。

冰山モデルシートを使用した実践のエビデンスも今後の課題であるが、国際的に標準となっている機能的アセスメントをベースとしたアプローチにどのように発展させていくのかを示していくことも必要であろう。

#### 【文献】

- 1) Johnny L Matson 1, Megan Sipes, Jill C Fodstad, Mary E Fitzgerald. (2011) . Issues in the management of challenging behaviours of adults with autism spectrum disorder. *CNS Drugs*, 25(7):597-606.
- 2) Mozingo, D. B., Smith, T., Riordan, M. R., Reiss, M. L., & Bailey, J. S. (2006) . Enhancing frequency recording by developmental disabilities treatment staff.

Journal of Applied Behavior Analysis, 39,  
253-256.

- 3) Challenging behaviour and learning disabilities: prevention and interventions for people with learning disabilities whose behaviour challenges, NICE Guidance. (2015) .



## 研究成果の刊行に関する一覧表

### 雑誌等

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
岡田裕樹・日詰正文・内山聡至	強度行動障害者支援に関するアセスメントと記録, 情報共有等についての先行研究調査	国立のぞみの園研究紀要	14号	1-5	2021
岡田裕樹・日詰正文・内山聡至	強度行動障害者支援事業所におけるアセスメントと記録, 情報共有等の実態についての調査	国立のぞみの園研究紀要	14号	6-11	2021

### 学会発表・講演等 特になし

発表者氏名	発表題目	学会名	形式	場所	発表年

– ICFシステム&行動観察システム –  
行動と環境の包括的アセスメントによる環境調整  
支援パッケージ

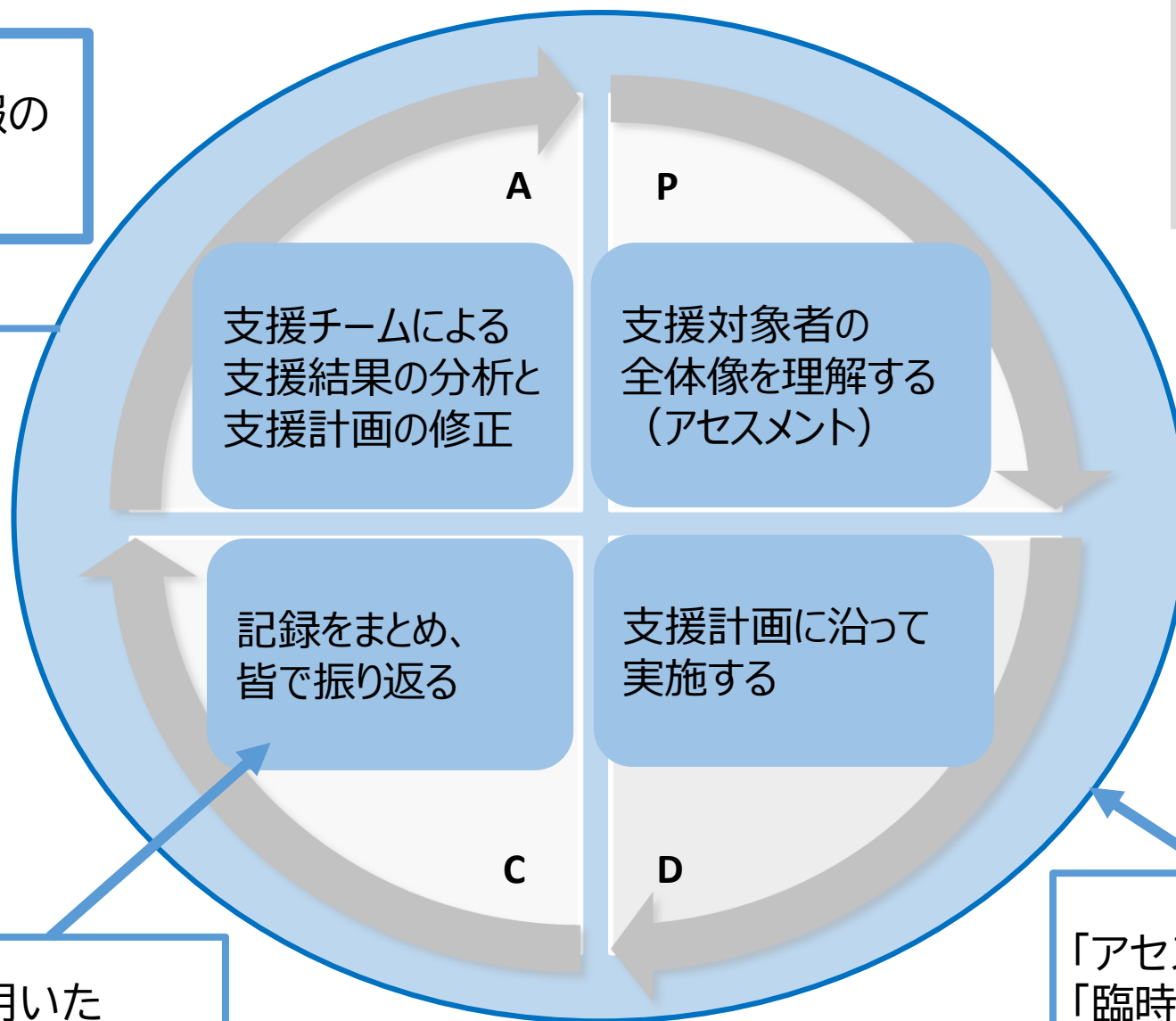
【実施マニュアル 令和3（2021）年度版】

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園  
令和4（2022）年3月

# パッケージ(PDCAサイクル)のイメージ

ICFを用いた情報の  
収集と整理

Plan = 計画を立てる  
Do = 実施する  
Check = 振り返る  
Action = ニーズを分析する



Observationsを用いた  
情報の共有と分析、支援効果の  
評価

「アセスメント」「日常の記録」  
「臨時の記録」の必要な項目を  
確認するための「自己点検  
チェックリスト」の活用

## 支援パッケージの流れ

内容	使用するツールなど
① ICFシステムへ記入し、全体像の把握	● ICFシステム
② 行動記録表を記入し、課題となる行動を選定する	● Observations Sheet
③ 記録の確認	● Observations分析HP
④ 課題となる行動のベースラインの記録	● Observations2
⑤ 記録の確認	● Observations分析HP
⑥ 支援会議の実施 冰山モデルシートで行動の背景を整理する	● 冰山モデルシート
⑦ 支援手順書の作成	● 支援手順書（事業所のもの）
⑧ 支援の実施 行動の記録	● Observations2
⑨ 記録の分析	● Observations分析HP
⑩ ICFシステムを見直し、支援前後の全体像の比較	● ICFシステム
⑪ 支援手順書の修正 ※⑧支援の実施へ戻り、サイクルを繰り返す	● 支援手順書（事業所のもの）

# ① ICFシステムへ記入し、全体像を把握する

- 使用するもの：ICF情報把握・共有システム（以下、「ICFシステム」）
- 取り組んでいただきたいこと：ICFシステムを使用し、利用者の全体像を把握し、情報を整理する。

## （1）ICFシステムの「情報把握シート」（Excel）を作成する

### ICFコアセット 活動と参加 17歳以上 情報把握シート 第1章

「活動と参加」シート 3つの質問 記入のしかた

①支援なしの場面では	<input type="checkbox"/> 困難あり	<input type="checkbox"/> 困難なし	<input type="checkbox"/> 詳細不明・非該当
質問1では、支援なしの場面で少しでも困難があれば「困難あり」を選択して下さい。「困難なし」は、項目が示す内容を、支援なしでも自力で達成できる場合に選択して下さい。			
②いま支援があるかどうか	<input type="checkbox"/> 支援あり	<input type="checkbox"/> 支援なし	<input type="checkbox"/> スキップ
質問2は、質問1で「困難あり」を選択した場合に回答可能となり、それ以外では「スキップ」が自動的に選択されます。支援のあり・なしについては、なにか少しでも支援をしていれば「支援あり」を、何もしていなければ「支援なし」を選択して下さい。			
③支援の効果は	<input type="checkbox"/> 大きい	<input type="checkbox"/> 小さい	<input type="checkbox"/> スキップ
質問3は、質問2で「支援あり」を選択した場合に回答可能となり、それ以外では「スキップ」が自動的に選択されます。支援の効果については、困難さの軽減が見られており支援の継続あるいは微調整でよい場合には「大きい」を選択して下さい。困難さの軽減が見られなかったり少しだけだったため、今後の支援効果の見極めあるいは支援の修正が必要である場合には「小さい」を選択して下さい。			

## ※情報把握シート「環境因子」

### ICFコアセット 環境因子 17歳以上 情報把握シート 第1章

#### 第1章 学習と知識の応用

##### 1. 目的をもって（わかろうとして、知ろうとして）五感（視・聴・嗅・味・触）を使うこと。

項目番号	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	チェック	補
d110	目的をもって見る	困難あり	支援なし	スキップ	<input type="radio"/>	①味
d115	目的をもって聞く	困難あり	支援あり	大きい	<input type="radio"/>	①と②③
d120	目的をもって触る・嗅ぐ・味わう	困難あり	支援あり	大きい	<input type="radio"/>	①②③に

#### 第1章 製品と用具

##### 1.2. 食べ物や飲み物、薬や栄養補助剤

項目番号	項目タイトルと環境因子の影響を把握する視点	把握状況	チェック	補足情報（当該項目の環境因子の具体例と具体的影響）
e110a	食べ物や飲み物	把握状況	<input type="radio"/>	①悪影響・生活低下の食品とその状態：納豆が苦手。納豆が出ると給食を投げてしまい食事が摂れない。水分摂取量に限りなく、水道水を飲み過ぎて嘔吐する ②好影響・生活上の食品とその状態：会食会 ③その他：納豆は、代替品で対応している。入浴後は嘔吐しやすいため、入浴前の服薬や食事提供は避けている
	生活の低下につながる悪影響をもたらすもの	あり		
e110b	薬や栄養補助剤	把握状況	<input type="radio"/>	①悪影響となる薬とその状態： 職員との関わりを求めるときに自傷行為を行い、塗り薬を要求する ②好影響となる薬とその状態：早朝覚醒があるため、服薬の薬内容を変更し、睡眠の導入を促す物から持続する物に変更 ③その他：薬を塗る時間を決めることで、薬へのこだわりが減った。睡眠リズムが整い、昼夜逆転がなくなった。
	健康度低下や生活の崩れ・依存につながる薬やサプリメントの悪影響	あり		
	健康度向上とよい生活の維持につながる薬やサプリメントの好影響	あり		

##### 1.3. 個人が日常生活や遊びで使う製品と用具

項目番号	項目タイトルと環境因子の影響を把握する視点	把握状況	チェック	補足情報（当該項目の環境因子の具体例と具体的影響）
e1150	日常生活で使う一般的な製品と用具（改造や特別な設計なし）	把握状況	<input type="radio"/>	①不快・使いにくい日用品と生活しづらさ：家電製品全般。興味はあるが、使用方法がわからず破壊行為に至ってしまう。特に扇風機へのこだわりが強い ②快適・使いやすい日用品と生活しやすさ：CDラジカセ。クラシック音楽を聴いているときは落ち着いていることが多い。 ③その他：扇風機を見ると壊してしまうため、扇風機を撤去し、エアコンでの生活に変更。エアコンのルーバーは外している
	使用時の不快さや使いにくさで生活のしづらさをもたらす日用品	あり		
e1151	日常生活での使いやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	把握状況	<input type="radio"/>	①不快・使いづらい支援用品と役立つなさ：トイレ後方に座るため便座を常に汚すことが見られる。背もたれにクッション材を設置したが、体制の変更と排尿時の失敗が増えた ②快適・使いやすい支援用品と役立つ方： ③その他：クッション材は撤去する
	使用時の不快さや使いづらさで生活に役立つ支援用の日用品	なし		
e11520	一般的な遊び用の製品と用具（改造や特別な設計なし）	把握状況	<input type="radio"/>	①不快・使いづらい遊び用品と妨げる状態：車の雑誌は好きだが、刺激が強く、外出の要求が増える。自分要求が通らないことで不安定になる。他の利用者に雑誌を破られてしまう
	使うのが不快で使いづらいために遊びを妨げる遊び用の製品や用具	あり		

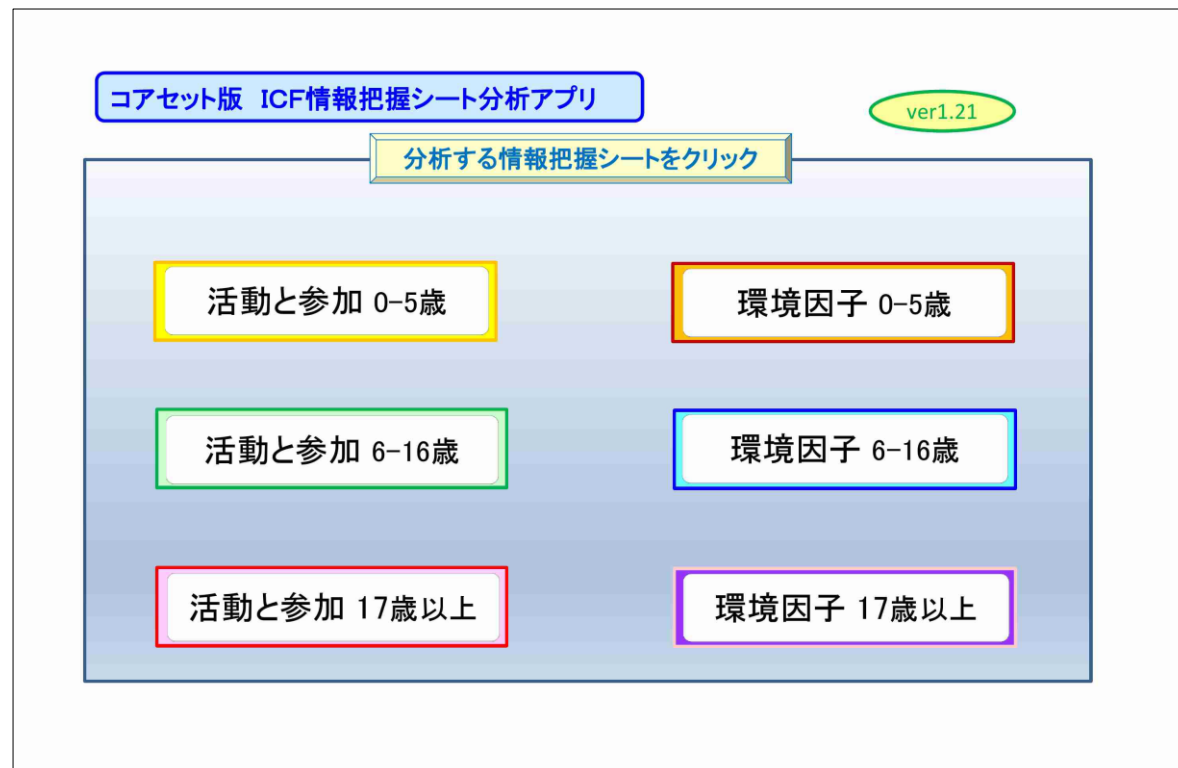
## ※情報把握シート「活動と参加」

- 対象となる利用者について、情報分析シートの各項目に沿って利用者の情報を記入する。
- シートのなかで、「活動と参加」、「環境因子」は必ず記入する。

### 【記入の際の留意事項】

- 推測ではなく、事実をとらえるためのシートという観点で記入する。
- 回答が難しい場合は、無理に回答しなくてよい。
- 「補足情報」は利用者の状況が把握できるように、なるべく具体的に記入する。
- 「わからない」「機会がないので判断できない」項目については、「詳細不明・非該当」を選択してよい。その場合、なるべく「補足情報」の「④その他」にその理由を記載しておく。

## (2) ICFシステムの「情報把握シート分析アプリ」(Excel) を使い、内容を整理する



- 「ICF情報把握シート分析アプリ」で、該当する項目（「活動と参加」「環境因子」など）をクリックする。
- 記入した情報把握シート（Excel）を選択する。

※「ICF情報把握シート分析アプリ」によって整理された「活動と参加」の項目の例

【強み（支援なしで困難なし）】

項目番号	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	チェック	補足情報
d455	移動すること	困難なし	スキップ	スキップ	○	①歩行は自力で行える
d540a	衣服の着替え、履き物の脱ぎ履き	困難なし	スキップ	スキップ	○	①衣類の着替え、履き物の脱ぎはぎは一人で言うことができる

- 記入した内容によって項目ごとに  
カテゴリー別に整理される。
- 項目ごとの内容を確認し、利用  
者の全体像の把握や支援に必  
要な視点などを整理する。

【支援の修正（支援効果小さい（なし））】

項目番号	項目タイトル	支援なしで	いま支援は	支援効果は	チェック	補足情報
d132	質問して知ろうとすること。	困難あり	支援あり	小さい	○	①本人から声出しやジェスチャーで質問をしてくるが、表現が曖昧で理解困難 ②コミュニケーションシートを活用し、指さして要求内容を確認する ③コミュニケーションシートだけでは、本人の質問・要求の意図が汲み取れないことが多い
d155	日常生活に必要な行為やスキルの習得	困難あり	支援あり	小さい	○	①物の扱いの加減ができない ②自助具の活用 ③こだわりが強く、一度獲得した方法を変更することが困難
d160	何かに注意を集中すること	困難あり	支援あり	小さい	○	①活動中に何度もトイレに行く ②タイマーを活用したり、活動終了後に本人の好きなものを取り入れることで仕事に集中できるようにする ③活動時間に変化はない
d161	課題や作業が終わるまで注意を逸らさないこと	困難あり	支援あり	小さい	○	①活動中に何度もトイレに行く・課題を壊す ②本人の興味関心のある課題内容に変更する ③初めは活動に集中できるが、途中から課題を壊し始める
d166	読むことの実生活での活用	困難あり	支援あり	小さい	○	①好きな車雑誌を見ることは好きであるが、文字を読むことはできない ②本人の好きな車の雑誌を定期的に提供する ③車の雑誌を見ることで外出の要求が多くなる

## ② 行動記録表を記入し、課題となる行動を選定する

- 使用するもの：Observations Sheet（スマホアプリ）
- 取り組んでいただきたいこと：1週間の行動を記録し、課題となる行動を選定する

※課題となる行動は複数選択してもよい。



### (1) 記録表を作成し、名前を入力する

- ・対象となる利用者の名前を入力する。
- ※名前は受講番号で記入する。



### (2) 行動を記録する日を選択する

- ・「記録表一覧」画面で、対象となる利用者を選択する。
- ・行動を記録する日を選択し、右下の+ボタンをタップする。





### (3) 行動を記録する

- 項目に沿って記録する。
- 項目は、「行動」「時間帯」「場所」「状況（人）」「状況（行動）」「対応」「推定される機能」  
※一度記入したものはタグマークをタップすることで選択することが可能。

### (4) 1週間分の行動を記録する

- 対象期間とする1週間分の行動を記録する。
- 1週間記録をとった段階で、chatworkでグループと記録の内容や状況などを共有する。

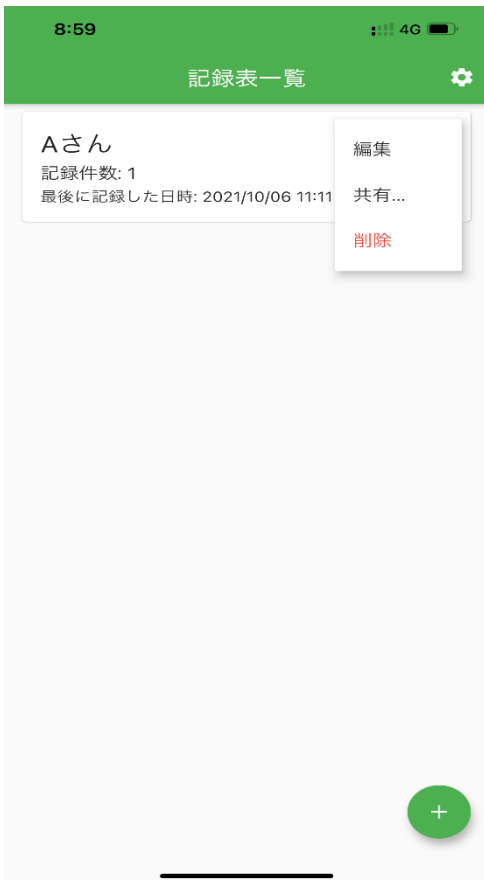


※記入例

### ③ 記録を確認する

- 使用するもの：Observationsの分析用HP
- (URL : <https://observationsanalysis.web.app/>)
- 取り組んでいただきたいこと：

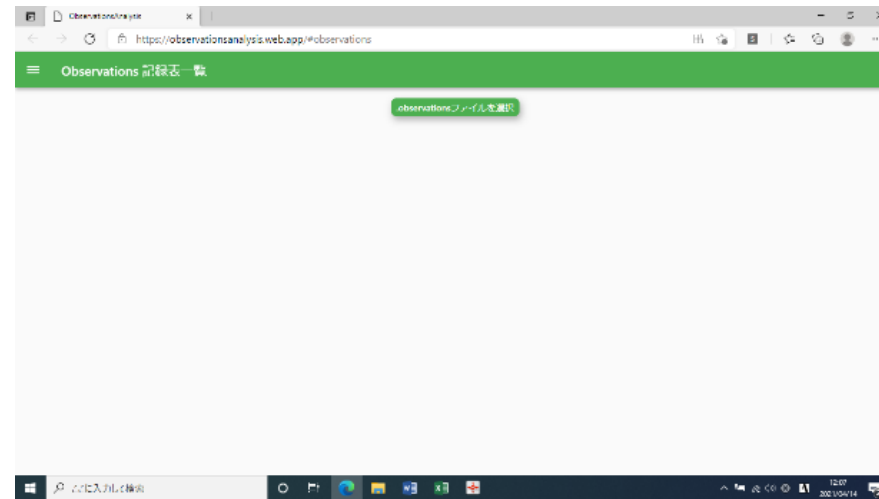
#### (1) アプリの記録をPCに送る



これまでアプリ  
(Observations Sheet、  
Observations 2) で  
取った記録を、各記録  
の画面右上のメニュー  
から「共有」を選択し、  
データをメールでPCへ  
送信する。

#### (2) 分析用HPにデータをアップロードする

Observations分析用HPを開き、左上のメニューボタ  
ンから該当するアプリを選択し、記録のデータをアップ  
ロードする。



#### (3) アップロードしたデータを確認する

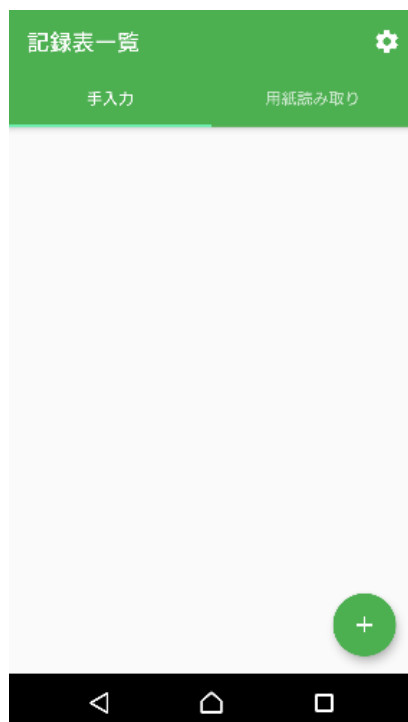
The screenshot shows a detailed view of a record for 'Aさん' (A-san) on the web application. The title is 'Aさんの記録一覧' (A-san's Record List) with a download icon. The record is displayed in a table format with the following columns: 番号 (Number), 記録日時 (Record Date and Time), 先行事象 (Preceding Event), 行動 (Action), and 後続事象 (Subsequent Event).

番号	記録日時	先行事象	行動	後続事象
1	2021/05/23 10:57	時間帯: 2021/05/23 10:57 場所: 居室～廊下 状況 (人): 職員 状況 (行動): 起床～朝食時は言葉遊びをしている。朝食後「やさしいジュースください」カードを忘れていたため促し、本人すぐに取りに帰る。帰室後、居室から走り出て職員に手を上げて向かう。	大不穩 (掴みかかり、号泣、ハンカチ破り)	対応: 興奮状態になっており、メモ提示するもなかなか入らず、職員に掴みかかること繰り返す。 「①おへや②すわる③おちつく④やさしいジュース」のメモ提示で少し切り替わり、手洗いセット要求。その後も走り出て職員に向かうことが11:00頃まで続き、都度メモ提示を行う。本人スケジュールを組み立てたり、「しんこきゅう！」と言いつつハースーハーと息をしたりする。ソファを倒して横になり、徐々にトーンダウンする) 推論される機能:

分析用HPで  
アップロード  
したデータ  
はcsv形式  
でダウン  
ロードが可  
能。

## ④ 課題となる行動のベースラインを記録する

- 使用するもの：Observations 2（スマホアプリ）
- 取り組んでいただきたいこと：行動の頻度や時間帯などを継続して記録する。
- ※記録を取る行動は、複数でも可。



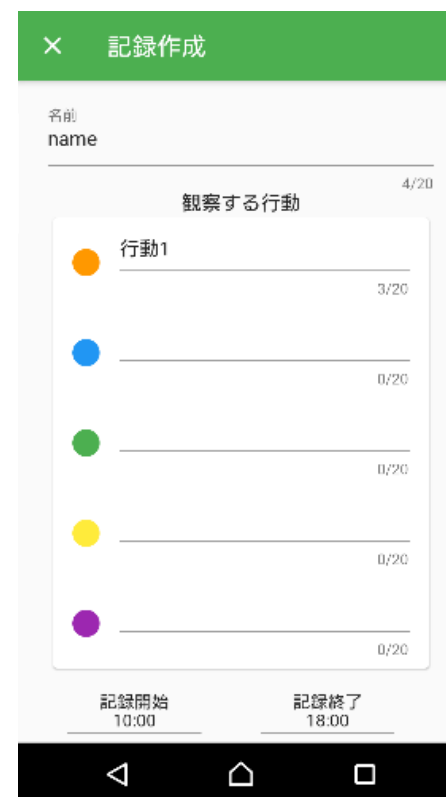
### （１）名前を入力する

対象となる利用者の名前を入力する。  
※名前は受講番号で記入する。

※記入例

### （２）記録する行動を入力する

- 作業②で選択した行動を入力する。
- 入力は、「記録する行動」
- 記録する時間について「記録開始（時間）」「記録終了（時間）」「記録間隔」を設定する。



時間	頬をたたく	服を破る	水へのこだわり	大声	未観察
10:00	0	0	0	0	<input checked="" type="checkbox"/>
10:30	2	0	0	0	<input type="checkbox"/>
11:00	5	0	1	3	<input type="checkbox"/>
11:30	0	0	0	1	<input type="checkbox"/>
12:00	2	0	1	3	<input type="checkbox"/>
12:30	1	0	0	1	<input type="checkbox"/>
13:00	0	0	0	0	<input type="checkbox"/>
13:30	0	0	0	0	<input type="checkbox"/>
14:00	1	0	0	2	<input type="checkbox"/>

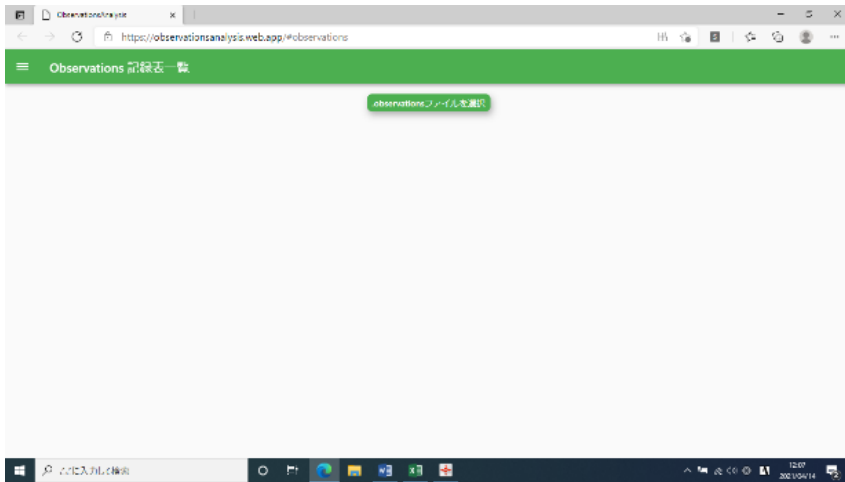
### (3) 行動の頻度を記録する

- 記録する日を選択する。
  - 時間帯ごとに行動の回数を記録する。
- ※時間帯ごとの行動の項目をタップすることで記録される。  
 (タップした回数が増えていく)
- ※修正する場合は右上のメニューボタンから修正を行うことが可能。

### (4) 行動の傾向を確認する

「測定時間における行動生起率」を確認する。





## (5) 行動の記録を積み重ねる

毎日2週間続けて記録をとる。

2週間記録をとった段階で、chatworkでグループと記録の内容や状況などを共有する。

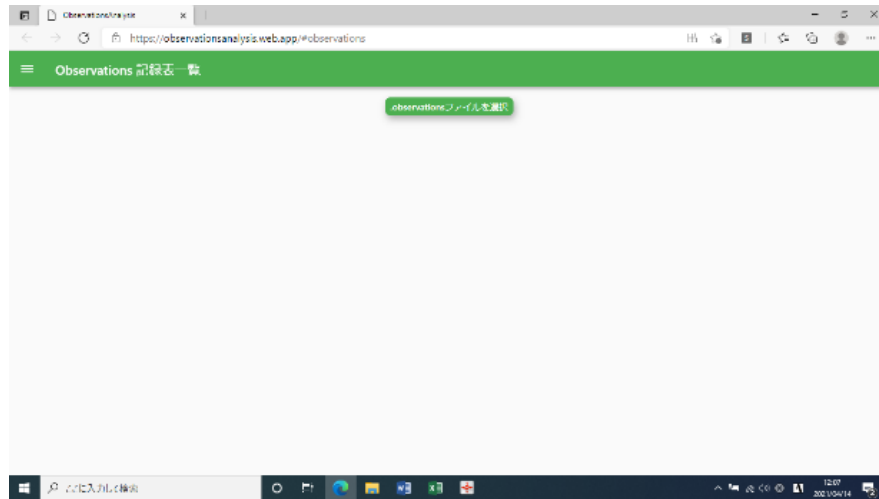
## ⑤ 記録を確認する

- 使用するもの：Observationsの分析用HP
- (URL：https://observationsanalysis.web.app/)
- 取り組んでいただきたいこと：

### (1) アプリの記録をPCに送る

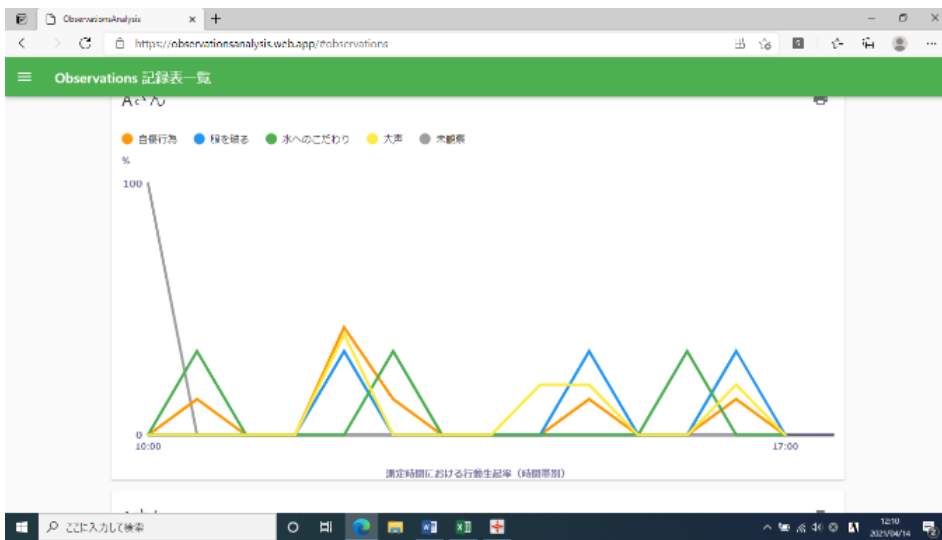
これまでアプリ (Observations 2) で取った記録を、各記録の画面右上のメニューから「共有」を選択し、データをメールでPCへ送信する。





## (2) 分析用HPにデータをアップロードする

Observations分析用HPを開き、左上のメニューボタンから該当するアプリを選択し、記録のデータをアップロードする。

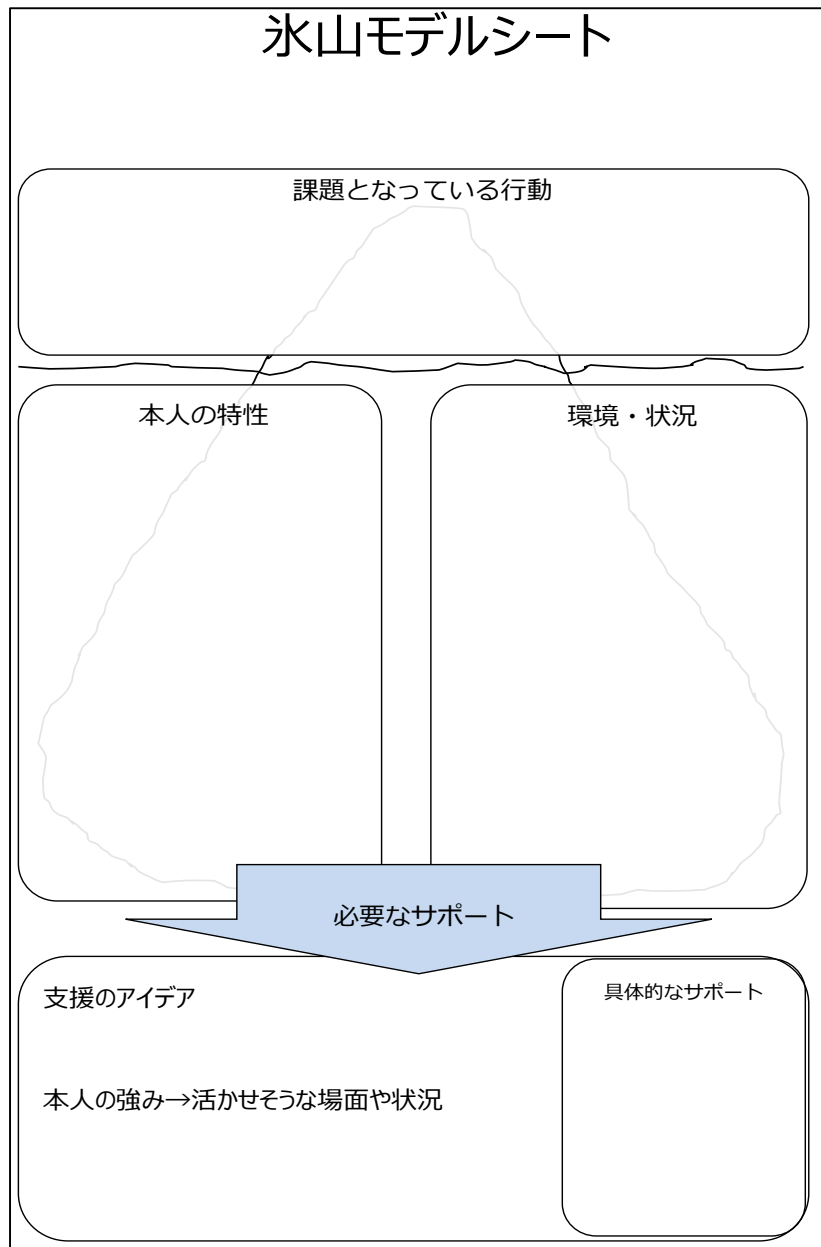


## (3) アップロードしたデータを確認し、分析を行う

分析用HPでアップロードしたデータを活用し、分析を行う。

## ⑥ 支援会議を実施し、冰山モデルシートで行動の背景を整理する

- 使用するもの：冰山モデルシート
- 取り組んでいただきたいこと：ICF（作業①）と記録（作業②④）等をもとに支援会議を行い、課題となっている行動の背景を整理する



### (1) 「冰山モデルシート」に落とし込む

- 課題となっている行動について、冰山モデルの項目に沿って背景要因を分析する。
- 分析した内容をシートに入力する。  
※項目は、「課題となっている行動」「本人の特性」「環境・状況」
- 必要なサポートを検討し、入力する。  
※項目は、「支援のアイデア」「本人の強み→活かせるような場面や状況」「具体的なサポート」
- 作業②④で複数の行動の記録を取った場合は、それぞれの行動に対して冰山モデルシートに落とし込む。

## ⑦ 支援手順書を作成する

- 使用するもの：支援手順書（事業所で使用しているもの）
- 取り組んでいただきたいこと：ICF（作業①）と記録（作業②④）、冰山モデル（作業⑥）を踏まえて、必要な支援を検討し、支援手順書を作成する。
- 支援手順書を作成した後、chatworkでグループと共有する。

## ⑧ 支援の実施および行動の記録をおこなう

- 使用するもの：Observations 2（スマホアプリ）
- 取り組んでいただきたいこと：作業⑦で作成した「支援手順書」を基に支援を行い、作業⑥の記録を引き続き行う。



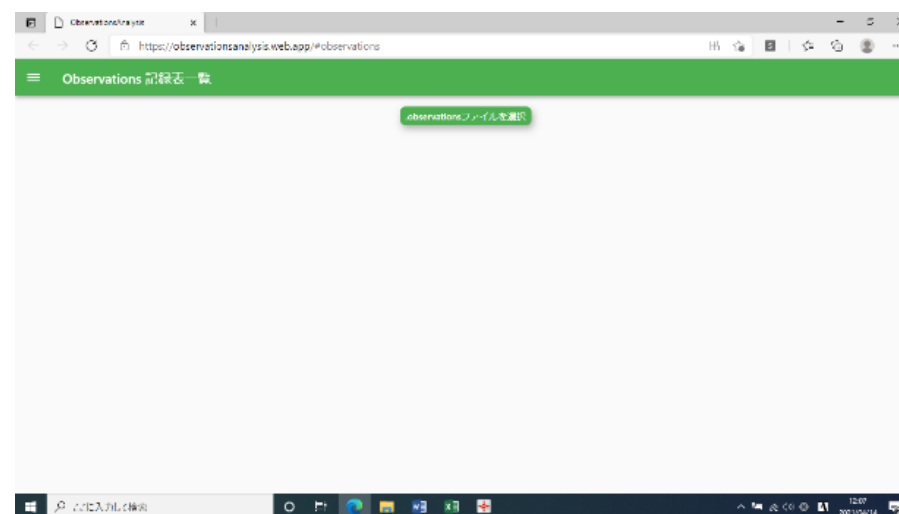
## ⑨ 記録を確認する

使用するもの：Observationsの分析用HP  
(URL：https://observationsanalysis.web.app/)  
取り組んでいただきたいこと：



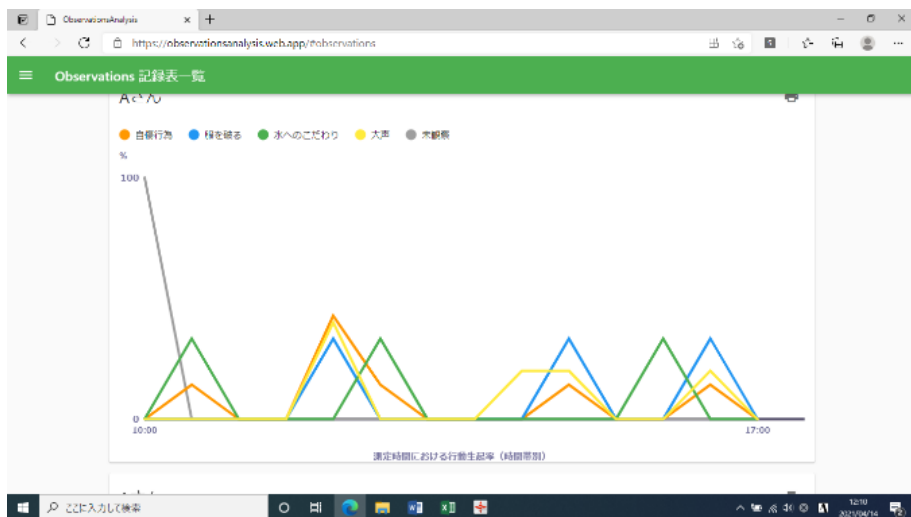
### (1) アプリの記録をPCに送る

これまでアプリ（Observations 2）で取った記録を、各記録の画面右上のメニューから「共有」を選択し、データをメールでPCへ送信する。



### (2) 分析用HPにデータをアップロードする

Observations分析用HPを開き、記録のデータをアップロードする。



### (3) アップロードしたデータを確認する

分析用HPでアップロードしたデータを基に、支援の効果を  
確認する。

## ⑩ ICFシステムへ記入し、支援前後の全体像を比較する

使用するもの：ICFシステム

取り組んでいただきたいこと：記録の分析を踏まえ、作業①で記入したICFシステムを見直し、支援前後の全体像を比較する。

- これまでの記録の分析を踏まえて、②の作業（ICFシステムの情報分析シートの作成）を再度行う。
- 全ての項目を書き直すのではなく、変化が見られた項目等必要に応じて加筆修正を行い、見直しを行う。

## ⑪ 支援手順書を修正する

使用するもの：支援手順書（事業所で使用しているもの）

取り組んでいただきたいこと：これまでの作業を踏まえて、支援手順書の見直しを行う。

- 作業⑩を踏まえ、作業⑦で作成した支援手順書の内容を見直し、必要に応じて修正する。
- 作業⑧の支援の実施へ戻り、可能な限りサイクルを繰り返す。